

---

# ハーヴェイ・サテライツ

毛糸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハーヴェイ・サテライツ

### 【Nコード】

N8110P

### 【作者名】

毛糸

### 【あらすじ】

火事場の馬鹿力を継続できる機械「リミッター」が発明された。  
人工衛星と電波的に繋がっているソレは、学問の第六科目と成るほどの知名度を上げる。全国の人々は莫大な力を持ち、今ではソレが普通と成った世界で、普通じゃない少年が居た。

——里堆経汰。力を手に入れた世界では普通じゃなくても「普通の男」

そんな彼の周りではとんでもない事件が起き続ける！

——笑いあり、涙あり、シリアスあり、というか何でもありの学園

バトルラブコメディ 第一歩目！（ハードル上げすぎた！）

## 「話「強い女と弱い男」

まず、力の変更という専門用語についての説明をしよう。

普段の人間の脳にはリミッターというものが掛かっていて、ソレにより人々は皆脳を三分の一しか使用することが出来ないと言われている。この《力の変更》と言うのは、そのリミッターの理論を逆転の発想で突いたようなモノだ。

リミッターが存在する事によって、人間はどれだけ肉体的に全力を発揮しても七・八割ほどの力しか出ないといわれている。この原因は十割の全力を出すと身体が耐えられなくなるというのも有るのだが、脳に掛かったリミッターのせいで三分の一しか力が発揮できない、というのが最もな理由であった。

そこで、とある大脳生理学者と幾何学施設きかがくの長は一つの単純で明快な発想をした。

「唯一リミッターを外す事が出来る火事場の馬鹿力を継続させる事が出来れば、人類は人類の壁を越えるのでは？」と。

火事場の馬鹿力と言うのは、自分が肉体面での逆境に立った時に起こるものだ。その逆境が自分の命に関わっていたり、絶大な危機感を持った時にしかソレは発揮する事が出来ない。脳のリミッターを一時的に解除させ十割の力を発揮する環境を作り、自分自身の体を捨てる勢いで生まれる力を人々はそう呼んでいる。

例を出すと、瓦礫がれきに自分が埋まっていて早く退かさないと火事による一酸化炭素中毒で死んでしまう、という状況だ。これは後者の一酸化炭素中毒や火事が無かった場合はきっと瓦礫を退かせないだろうが、火事となると話が別になる。退かさないと死ぬのだ。そうなれば自然と瓦礫を退かす力が出る。それが火事場の馬鹿力。即ちエキサイト火事場力だ。

簡素な説明だが、言いたい事を要約すると「脳のリミッターを外すことが出来る火事場力エキサイト状態を継続する事で、人間の壁を越えられ

るのではないか？」という学者の意見。そしてその子供のような発想をした研究者の夢が、現実となった事。

「はあ……」 くそつたれ、と心で呟く。

窓越しから見える景色は、視界を運動場で走る生徒で埋めていた。あそこにいる生徒達も全員が、現在《力の変更》を使うことが出来る。生まれつき使えるんじゃないくて、八歳になった時に護身用として全国の子供に配られる『力の変更をする為の機械』を使用することと出来ている。

その機械を皆は単純に「リミッター」と呼んでいる。これは宇宙にある人工衛星サテライトと間接的に繋がっている為、どんな場所からでも起動することが出来る。さらに人工衛星サテライトの情報を借りる事で他のリミッター所有者を検索することも可能だ。

これが、近未来の世界構図。

「だけど俺には——」 呟き終える前に、

キーンコーンカーン……と、すっかり聞きなれたチャイム音が言葉を上手く隠した。

それと同時に周りがざわつき始め「おわったー」や「次家庭科だー」などという、安堵あんどを交えた愚痴ぐちが次々と耳を通る。そんな音を聞き入れているココは、窓側上から四番目にある俺の席。いい場所だと思うが、今の季節は左窓の隙間風で肌寒い。授業中なんて前髪に丁度風が吹いて、ストレスが溜まっていく一方だった。

「さて、授業はコレにて終了致します」

丁重な三十代の女性が数メートル先の教卓でお辞儀をすると、スタスタと教室を出て行く。

ソレにつられるかのように他の生徒も次々と席を立ち、別の教室にいる友達の元へ行くこうとする。

——よくある中学校の光景だった。

俺の通う中学校はエスカレーター制らしくて、他に行く希望が無

ければそのまま高校に行く事が出来る。だからなのか。二月の終わりに差し掛かっている今現在でも、クラスで誰一人勉強や受験で休んでないし教室で復習すらしていない。酷い所では一日中寝ているヤツもいるくらいだった。

「はあ」

最近お世話になりっぱなしの溜息だ。この平凡な日常を見るたびにノンビリした気持ちになってしまうのか、はたまた退屈で詰まらないのか……極力前者であって欲しい。

「まー、平和が一番だよな」 席を立ち、ぐっと伸びをした時、

ガゴオン！ と、黒板側にある教室のドアが凄まじい音を立てて吹き飛んだ。白い木製のドアは破片を撒き散らし宙に舞う。木埃もドアあたりに舞って、周辺が古いピントのようにぼやけた。

「へ、平和が一番ですな……ははは」 微笑と苦笑を交えながら呟く。

ゴガンツ！！ 黒板の近くにあった金属性教卓が轟音と共に潰れる。その周りにいた男子生徒が何処かにぶっ飛んでいき、ぺしゃんこになった教卓は教科書を落とした時のように床に倒れた。

「へ、平和……平和が一番だ……はは」 それでも呟いてみせる。バリーイインツ！！ 一番前の窓が訳もなしに吹き飛んだ。近くにあったテレビの液晶も空気の波紋と同時に粉々と砕けていく。

「へ、いわ……じゃねえだろツ!?」 呟きからのシャウトツ！

——瞬間、

ドンツ！ 恐竜が地面を勢い良く蹴るような爆音が聞こえたと思えば、何も無い虚空から一人の少女が現れた。まだ宙に浮いていて長い髪がひらりと靡いている。俺との距離、一メートル。

そして、目が合った瞬間、

「馬力ぜんかーい！ さあ、次はテメエをブツ殺すわよツ！！」 殺しの視線だと思った。

長い髪と整った容姿は、宙に浮いたまま大きく足を振りかぶり、身体を超人並に回転させ——

「里堆経汰、今日がテメエの命日よ」

風で靡くプリーツスカートの中を覗く暇もない速度で――

「しねええええええええええ！！！！！」

回し蹴りを炸裂させた。

「ちよ、か——」  
言い終わる前、

ドガアアアッ！！！！　その轟音と同時に教室の机、椅子、床が木端微塵に吹き飛んだ。特に少女の蹴った床には小さなクレータが発生。震度三の揺れを無理矢理作り、その震源地となる場所にはやはり一人の少女。

「いつ、居ない!？」

そう、一人の美少女しか居なかった。

「ど、何処へ行った！里堆経汰ッ！！！」

攻撃を間一髪で避けて隠れる事が出来た俺は、少女に言う。

「教える訳無いだろ？」

「——ッ！！！」

「お前、俺がどれだけイレギュラーなのかぐらい、承知の上でやってくるくせに」

騒ぎのあったクラスが静寂に包まれたあと、「ったく」と言葉を紡ぎ。

「俺がどんな思いで生きてるのかも知らずに……リミッターを解除して襲ってくる女の子……ねえ？悪いけどそう言うマゾな趣味はねエし、知りたくもない。……っ！つか、お前らがわかんねえ」

隠れている場所から大きく酸素を取り込み、不満をぶつけるように、

「俺は力の変更ができねえ凡人だからよオツ！」

それをクレーターの中心、震度三の震源地に佇む美少女に隠れている場所から投げる。

その消しゴムはコツンと少女の後頭部に直撃した。

「ざまあ見やがれ、能力者」

今日も怒りを買っては逃げ続ける。

## 一話「強い女と弱い男」（後書き）

最後まで読んでくださった方、有難う御座います。  
途中で挫折してしまった方も、有難う御座います。

一文一句でも読んで下さる方にとても感謝です。

全体的に、文章力がまだまだだと思ってます（表現とか状況説明とかその他諸々）。

ですが、自分なりに頑張りました。

もっともっと勉強して成長したいので、皆さんよろしければ感想をお願いします。

僕の人生の糧となる感想を！（スケール大きいですが）

主人公が狙われる理由やタイトルの意味については一話で纏められなかったので、次話に紹介します。申し訳ありません。

## 二話「狙われる理由とハーヴェイ・サテライツ」

「平和だ！」

我が里堆経汰は授業中が平和だと思う。

ダンボールでテーピングされた自分の場所を見て言う事ではないが……。まあ、しょうがない。だって床にクレーター空けられたんだもん。ここはそんな細かい事なんて気にしない。それよりもダンボールで床と壁を応急処置してくれる校長先生に感謝だろう。中身すつかすかだけど、おかげで授業受けれてるし机と椅子も新品……涙が出そうだぜ。

「やっぱり平和だ！」 「うるせえぞ里堆」

先生が黒板に字を書きながら俺に言った。その動く手は止まらない。

さーせん、とだけ言う隣の子がクススと笑う。「何が可笑しい」と聞けばまた先生に怒られるので口を止めると、隣の子は此方を見ながら、

「ねえ、さとつついん」

「何その某不二子さんのストーカ怪盗がとつつぁんて言うような呼び方。最後にテールでも付けば最早女の子に——」 「うつせえつつてんだろウン。ス野郎」 「おいそれはマズいだる教師として」 思わず教師にツツコミを入れる。口が悪すぎる。あー、お前あれか、あの元暴走族GTOってヤツか。……そいつでも言わねえよ！ 散々心でツツコミ終えた後、またクスリと笑う隣の子に極力小さな声で言う。

「なんか呼んだ？というかまずその呼び方止めてくれ」

「うーん。じゃー、さっちんでいい？」 馴れ馴れしいなこの女、などとは思っていない。

「……まあいいや」

「いいならいいけどー。あーえつとね、さっきので感動したよ、私」

目を星のように輝かせ、両手を組みながら胸を張りだす隣の女子。名前はたしか荻野深愉だっけ……。クラスに居る男子の人気を取っている清楚天然女で有名だった気がする。揺れるボブヘアと髪の毛の光沢が清潔感を醸し出す女子だ。……って、その前に、

「は？」　まず疑問だ。何に感動したんだよコイツ。

「ほらほら、さっきの女の子。あれ木崎ちゃんでしょ？学年でも高クラスな力の変更ができる人。女子の中では二位だもん、すつごく有名だよ」

木崎溪。容姿と頭脳にずば抜けていて、力の変更も莫大な女だ。さっき襲ってきたヤツであり、容姿などに優れているくせに性格悪くて常識がなっていない人。

ちなみに、今出てきた《力の変更》には個人差とかがある。一、五倍にしか出来ない人も居れば百倍に出来る超人も居るらしい。あの女は力を通常の五十倍に変更出来るらしいから、こんなクレーターが生まれてダンボールを敷く羽目になりました。メモメモ。

「え、だから何？」　俺はまともな答えをしたつもりです。

「いやー、仲が良いんだなーっておもってさあ。あんな有名人と仲いいなんて感動だよー」

「喧嘩するほど仲がいいという言葉、アイツには通用しないんだけど」

「付き合ってたりする？」　「人の話を聞け。俺のさっきの言葉を考えてからモノ言え」

「あの子と付き合うのはひっじょーにマズイ訳です。多分ファンの男子生徒に殺さるのですよお」

「……コイツ、わざとやってんのか」

\*\*\*

俺が狙われる理由というのは至ってシンプルだ。

自分には全く《力の変更》が使えない。それも、力の変更をするための装置「リミッター」をつけてどうこうと言う問題ではなく、俺が着けるとリミッターは全く機能しないのだ。

リミッターの大きさや形はスライド式の携帯電話ほどで、皮膚のどこかに当てると機能する。微弱な電波を筋肉に送り、脳から送られる80%の力量伝達信号をハッキングして100%に塗り替える、というのが仕組みだ。機械に操られるのもどうかと思うが、あくまで変更されるのは力量の電波だけなので身体が勝手に暴走する事は稀まれの稀と言うほどに無い。

そんなリミッターだが、俺はソレに触れるだけで電源が落ちてしまう。本当に少し触れるだけで。触れた場所から離すと直ぐに再起動するのだが、やっぱり触ると消えてしまう。

狙われる理由がそれだ。

なんというか……俺の性格が悪い嫉妬だけど、力の変更が出来てソレで輝いてる人を見るとつい悪戯いたづらをしてしまうのだ。あの襲ってきた女、木崎深も俺の犠牲者のようなものだった。中学入ったぐらの頃。人気の無い所で先輩に絡まれて、その時に力の変更を助けてくれたのが木崎だった。でも俺はそう言うヤツらに素直に謝れなくて……つい「大根足に助けられても……ねえ？」とか心にも無い事を言ってしまったのが原因だ。今思うと本当に申し訳ないが。

「すみません、木崎さん」

屋上でコーヒー片手に青空を見る。今日も雲一つ無くて綺麗な冬の景色——、

「今更謝られて許す、とでも？」

ビクウ！ と身体が跳ねた。危機感を感じ、持たれかかっているフェンスを握る左手がじんわり濡れてくのが解る。

「そ、その声は……」 後ろから聞こえてきた声に、首を動かさず  
応えようと、

「そんなに硬くならなくていいわよ。流石に何度も学校は壊さない  
っつーの」

「だ、だよなー……ははは——」

「壊さないように殺してあげるから」 「——ッ!」 「あつは  
は、冗談」

心臓に悪い冗談は控<sup>ひか</sup>えましょう。

「んで、何でここに来たんだよ木崎。こんな寒い時期に昼休みの弁  
当を屋上で食べるヤツは居ないんだけど」 チビチビとコーヒーを  
啜<sup>すす</sup>る。もう生温い。

「ペラペラうつさいわね。テメエが居るでしょう?」

「俺に合いに来たとか?」 「嫌な冗談は止めて。性格悪いのは相  
変わらずよね」

絶対あの時の事を根に持っている。とか感じながら、

「さーせん。素直じゃないだけっす」 「解<sup>と</sup>ってんなら直す努力し  
なさいよ」

「さーせん」 「……、まあいいわ」

それっきり沈黙が続く。

春に近付いている季節では風も薄くて、本当に静か……いやーで  
も何か喋らないと。コレは男子として一肌脱ぐしかない。

「そっといえばさー」

「えっ、ああ、何よ?」 突然で驚いた感じた。

振り向かず、空を見上げながら言う。

「お前って、ツンデレのデレが無い感じだよな」 「リミッター解  
除」 「さーせん」

またしばらくの沈黙だ。会話が続かないのではなく、如何<sup>どう</sup>しても  
素直に話が出来ない感じがする。

「それじゃ、私次体育だから。そろそろ行くわ」

「お、おう」 合間合間に飲んでしまつて空の缶<sup>缶</sup>コーヒー。それを

持った手をパタパタと振ってサヨナラの合図。

カツカツ、と学校指定の硬い上靴が遠のいていくのを耳で感じた。屋上のドアがガチャリと開く音が鼓膜を叩いた後、

「あー。私、結構屋上好きだから」

そんな言葉が耳を通った。

何故かソレだけが鮮明に繰り返され、廊下を勢い良く走る足音に少しだけ胸が高鳴る。

「……報告いるのか、それ」

十秒後に口を開いて、その時初めて後ろを振り返る。

勿論、誰も居ない。

\*\*\*

「つまり、リミッターで《力の変更》をする事を『ハーヴェイ』と呼ぶんですねえー。そして力の変更をしている状況、その間を『ハーヴェイモード』と言います。スーパーサ。ヤ人のようなモノです。そしてハーヴェイとは《力ある生き物》を挿すのですが――」

今年で60歳になった生体理論担当である理科の先生が弱々しくもペラペラと喋っていく。因みにこの先生は俺よりもミハーだ。

精神年齢は15歳。

とか紹介しつつも俺は縦肘たてひじを突いて教室を伺う。それでも先生の弱々しい声は聞こえてきた。

「リミッターは宇宙に散らばる無数の人工衛星、つまり『サテライツ』とリンクしているんですねえー。故に、リミッター所有者の詳細を掴む事が出来ますねえ。勿論、阻止も可能で――」

こんな問題は小学校の頃にやるのだが、小学生では理解できない所があるため中学三年生の後期にもう一度復習をするらしい。

殆んどの生徒が聞く耳を持たないところから、もう解っている様子が伺える。

鳥の囀りも聞こえるくらいの静寂に先生の声だけが教室を覆う。  
豊かな感覚。

居心地が良くて、何より、

「平和だなあ！」 「うるせえぞチン。ス野郎」 「お前もかよッ  
!？」

この時代の風景を、とある人はこう呼んだ。

ハーヴェイ・サテライツ。

## 二話「狙われる理由とハーヴェイ・サテライツ」(後書き)

愛読有難う御座います。

これでだいたい世界観が解ってもらえると嬉しいです。

疑問点などありましたら、ご報告お願いしますm——m

次回から本編行きますっ！

それでは。

### 三話「黒い何かと死の予感」

\*\*\*

異常なまでの暗闇だった。

「――殺さなきゃ」

そこに紛れる一人の少女は囁いた。<sup>ささや</sup>暗闇で見えない細い手足は体操座りをしている。

「殺すの……」

古代文字を読み上げるようにカタコトとして、魂を吸われたかのように無感情な声。

「ふふ。それじゃあ……行くよ」

裂けるような笑みには純粹さを微塵も入れない。何処から見ても悪の表情。

「待っててね」

5歳児のようなその少女は小さく呟く。

「――お兄ちゃん」

刹那、少女の身体は虚空へ消えた。

\*\*\*

授業中、縦肘を付いてぼーっと授業を聞く。

今日一日は色々あった。3時間目終了直後、女に襲われて（勿論肉体的な意味で）俺の周辺はダンボール化。その次の4時間目には隣の天然女子に声かけられて勘違いされる。そして昼休みは無駄にドキドキしてしまい、その後の5時間目はハーヴェイやサテライツ

についての説明を聞いて、現在6時間目も終了に差し掛かっている。  
「はあ」

帰ったら寝たい。とつてもとつても眠りたい。さつき放課十五分の仮眠をとつたにも拘らず眠いのだ。精神的にも肉体的にも酸素を消費しすぎた。ちなみに眠くなるのは酸素が少なくなってるかららしい。

6時間目は生体物理だ。教室で気軽に出来る《力の変更》を用いた対ハーヴェイモード戦闘時対策法。一度リミッターを解除すれば力を自在に調節できるけど、出しすぎると体が壊れる恐れがあるらしい。それについての対策法と攻撃のガードの仕方を一人の男子生徒を実験体にして黒板前でやっているが、俺には見る必要がない。なにせ、俺がリミッターに触れるとソレの電源が切れてしまうのだから……。ケータイに磁石を当てるのと同じ原理で、触れると消えて離すと元に戻る。つまり、俺は力の変更以前に変更する機械を持てない。故、学んでも意味が無い。

あれ……。じゃあこの時間俺寝ててもいいよな？うん。寝よう。  
目を瞑れば、割と直ぐに意識が遠のいた。

\*\*\*

——おにいちゃん。

「——ッ!？」

背筋の凍るような感覚で目が覚める。不意に周りを拝見するが、誰も居ない。

「……授業終わったのか」

ぼそりと呟く。窓側からは夕暮れの景色が伺えて、誰も居ない教室を黄昏に染めていた。俺の席は黒板を前にして一番左の上から四番目。その場所から見る教室の景色は俗に言うロマンチックという

やつだ。ここに女の子が居ればすっごく嬉しい限り――、

「おはよう！」

「――ッ!?」

本日二回目のビクウ!

背中をトントンと二回叩かれ、誰も居ないと思っていた自分の心境を打ち殺した。冷汗が出る前に咄嗟とっさで後ろに振り返ると、

「……………あ、苺野かりの」「せいかーいつ」「ソイツは人差し指を立てながら元気に言い出した。

右半分が夕日に染まっていて栗色のボブヘアが更なる光沢を生み、それがキラキラと星のように……………うん、要約すれば可愛いって事だよバカヤロウ! (ツンデレ気味に)。

いや、美男子ならまだしも俺がツンデレ風に言つと汚れるだろうが。まあとりあえず、

「何で居んの?」「寝顔を見つめてた」「ドキッ!

「あ、今ドキつとしたでしょー?」「からかいの目線が「憎たらしい」と書いて「可愛い」と読める子だ。

し、してないって!と嘘をつくと「ホントかなあ?」と言われたので、本題(というか疑問)を尋ねる。

「可笑しいだろう。なんで俺が寝てるのに苺野までココに居るの? ひよつとして苺野も寝て――」

言い終わる前に、苺野は純粋な笑みを浮かべながら、

「いやあー、私日直ですし」

心拍数上昇中につき体内温度も上昇した。言い返そうとするが口が悶もたえて言葉が出ねえ。

「あつ、い、いや、その……………それもからかいの一つですか」

「いえ、コレはマジにごぜえまつすー」

良く見ると左手には黒板消しがあった。そして、苺野が今座っている机には学級日誌が置かれている。

「え、ま、え、えええ……………。もしかして、こんな時間まで俺起きるの待ってたとか」「うん」

即答だった。

ソレを聴いた瞬間に苺野の株が上昇する。

「ご、ごめん……」 素直に謝らないとな。

「いえいえ、気持ちよく寝てたみたいだからさー、起こせなかったんでっす。逆に起こさなくてゴメンナサイですよー」

苺野は笑顔を崩さずにニコニコと言ってみせる。

「あ、うん。別に俺はいいけど…… ホント、ごめん」 席を立って、ペコペコお辞儀。

「あーさっちゃん」

何かを言いたそうに、人差し指で頬を掻いているので「え？」とだけ言っと、

「ゴメンよりアリガトだよー、やっぱり」

「あ、そうだね。ゴメン」

「アリガトですよ」

「あ、うん。起こしてくれてありがとう」

苺野は「それでよしっ！」と親指を立ててウインクをした後、「では、拙者<sup>せっしゃ</sup>は退散する！」とか言いながら光の速さで教室から出て行った。

ふと辺りを見上げると、黄昏だった教室の景色は何時の間にか暗くなっている。時間の流れが春になりかけていると思った。二月の終わり頃。

「いや、まで。日直の仕事してけよ」

学級日誌の側においてある教室のカギは、薄く夜光を反射させる。

\*\*\*

「こ、これは——ッ!？」

先ほどまで生体物理の授業をしていた石則先生いしのりが職員室の席に戻り、隣で大きな声をあげる。

「如何したんですか？石則先生」

隣に座っている同じく生体系担当の僕は静かに声をかけると、

「不味いぞ……。キミ、生体心理担当だろう？なら解る筈だ。ちょっとコレを見てくれないか！？」

バツ！と勢い良く小型ノートパソコンを渡され、そのディスプレイに目を通すと、

——そこには、あつてはならない反応があつた。

「こ、これって、まさか——」

「ああ、存在外の集合体……——イレギュラーだッ！」

「で、でも、この反応……って、まさかッ！！」

「そうだ。調べた所だが、三年二組の教室のカギがまだ返されてない！誰かが残っているという事だ！そして、この反応場所は」

「——三年、二組……です」

僕が呟くと、石則先生は掌で机を叩き大声を張り上げる。

「救急隊と警察を直ちに呼んでくれ！これは大事態だ！たしか、授業中に黒板を見た所日直は苅野だったはず！彼女はソレほど力の能力が無い、下手したら——死ぬッ！！」

職員室中の先生は大騒ぎで動き出す。何かの祭りがあるように、何か災害があつたように、真剣な眼差しをしていた。

——その中に、紛れる様に。

——二人の女子生徒が職員室を出て行ったように見えた。

僕が後を追うように職員室を出るが、そこには誰も居ない。

誰も、居ない。

### 三話「黒い何かと死の予感」（後書き）

読んでくれてとても感謝しています。

低文章力で表現＋テンポに無駄がありますが、必死に執筆しているか細い糸です。

内容をちよつと続きモノ風にして、本編に突入させてみました。

ラスト、まさかの急展開はちよつと焦りすぎた感があります……。

それでは、愛読有難う御座いました。

#### 四話「其々の視点と心臓悲劇」

\*\*\*

——存在外の集合体。それは、リミッターが発明されてから起こりうる事となった。

リミッターの電波は無数の人工衛星から間接的に繋がっており、その分常に微弱な電波を張り巡らしている。そして存在外の集合体、それはこの微弱な電波から生まれる「ポルターガイスト」のような事である（実際にもイレギュラーやポルターガイストと呼ばれる）。張り巡らされる電波の錯乱によって机などの日常品が自動的に動いたり、空気中に黒い気体が生まれたりもする。この現象は、決して 科学では詳細を語ることができない。

科学では、解明されていない。

\*\*\*

錯覚なのだろうか？

——現在この視界に移る光景は。

教室の左側に張り巡らされたガラス窓から夜の光がゆったりと差し込んでいる。月明かりが妙に眩しく感じられる中、教室の中心にヤツは居た。

「おにいちゃん」

禍々しいオーラを纏ったような雰囲気と表情。ギタギタに裂けるような笑み。そして、その姿と反比例するような長い黒髪は翡翠のような美しい光沢を作っている。

——右手に黒い玉。

——左手に尋常じゃない大きさの鎌。

5才女のような外見と黒いボロボロのワンピース。

人生経験の薄い俺には全てが受け入れられない状況だった。多分、濃くても受け入れられないだろうが。

「おにいちゃん？どーしたの、そんな顔して？」　へへへ、と笑っている。

俺は言葉を出す事もしず、ただ少女の鎌からツーツと滴る赤い液体を眺めている。

「血……」

「どーしたの？おにいちゃん。顔が怖いんだよー、エレン怖いよー」  
ソイツは馬鹿にしているように、身長では下の差を縮めるように、上からモノを言った。

「誰……の——だ……」

「え？聞こえないよ？エレン何も聞こえな——」

「誰の血だよって聞いてんだクソチビツ——」

持っていた学級日誌を強く地面に叩きつけ言うと、その上に乗っかっていたカギがジャラリと床を滑った。三年二組の札を包むプラスチックにヒビが入る。

「お、怒らないでよ」　目に涙を浮かべた暗黒少女。

「——……うぐ、ぐずあ、うう」

「うるせえよ。誰の血だって聞いてんだ。お前が誰だかは知らないけど、名乗る前に質問に答えろよ、——その鎌の血は誰の血だ？」

「うぐ、ひつく、あう、う……ぐう、ふ、ふふ、ふふふふふふ」

怪訝どころではない。ソレを越えた闇、漆黒の表情が少女を包み、その口で——

「——さあ、誰のかなあ？」

宣戦布告の烽火を上げた。

「——解った。お前が如何しても言わないってんなら、倒した後に

聞いてやるっ！！」

\*\*\*

僕が職員室で見たのは異常な光景だ。

石則先生から渡されたパソコンのディスプレイには学校の地図が載っていた。その三年二組に「NI/100@P」とかかれた丸い反応があつた。この時点で異常だと思う。

NIというのは「No」「Identity」の略称系で、日本語で言うならノアイデンティティ。意味は、存在理由が見つからない、というもの。これは「存在外の集合体」つまりポルターガイストの事を表している。

その次のスラッシュ100というのは、そのポルターガイストのレベル。全部で120レベルある中の100は相当なものだ。どれくらいかと言えば、爆発が起きたりその場所なら殆んど空間が淀んで見えるくらいのポルターガイストレベル。

そして最後、@という文字。これはそのポルターガイストの種類を指す。このアットマークのPは……Person。

つまり——人だ。これは、人のポルターガイスト。危険度100の人間が生まれている、という事を示していた。

「川上先生ッ！！」

「はっ、はい！？」

考え事をしていたら後ろから呼ばれてしまい、僕は背筋を伸ばして答えた。

「ちよつとコレを見てくれ！今分かったんだが——」

「な、なんですか？」

後ろを振り向けば、さっき慌ててノートパソコンを見せてくれた

石則先生が居た。またパソコンのディスプレイを此方に向けてくる。  
「ここだよ、この「NI/100@P」って部分、良く見てくれッ  
！……！」

「……？」

暫く、とはいっても一分ほど睨めっこすると……。

ん？何だコレ？エ？え？エえ？……三年二組の地図の中に居る「  
NI/100@P」の周りに円を書くように薄い@が沢山……。

沢山。 沢山沢山沢山沢山沢山……。

その@の横には、必ず「O・E」の英文字。意味が解らない……？  
何だ……、コレは……。何だ……なんなん……ん？……——まさか  
ッ！？

「ふざけないで下さいッ！！何の悪戯ですかコレはッ！！……！」

「悪戯……なんかではない……——事実だ」

生まれて初めて大声を出した。

職員室の大騒ぎがぴたりと止まる。

……。こんなの、あつてはならない。絶対に、確実に、あつては  
ならない。

「なんで……どうして……、何故この学校に戦争と匹敵する程悲惨  
な英字があるんですかッ！」

Ollオール。全ての物質が発生している場合に現れる英字。

EIIエラー。人工衛星の操縦が不能な意味を指す英字。

「存在外の集合体」が発生するのは沢山の人工衛星から繋がるリ  
ミッターが存在するからである。という事は、そのリミッターを悪  
用する事で電波的に繋がっている人工衛星をハッキングすることも  
可能。

だからこれは、ハッキングした人工衛星を操って電波を操作し、

「@O」つまり全てのポルターガイストを出せる力を作った、と言うわけになる（何度も言うがポルターガイストは人工衛星から繋がる弱い電波で稀に発生するため、操られるとその稀が常になってしまふ）。

要約すると「人工衛星の電波で生まれるポルターガイストを自在に発生させる」という事だ。

その@が囲んでいるのは「N I / 1 0 0 @ P」。三年二組に居るポルターガイストで生まれた人間。

つまりは、そこに居る人間が「ハッキングの犯人」であり、「人工衛星の電波を乱した張本人」であり、「存在外ポルターガイストの集合体を自在に出来る事になった超人」であり、「今世紀最大の危険生物」だった。

「これじゃまるで……この三年二組にいるポルターガイストで発生した人間が《神》みたいなモノじゃないか」

恐怖でそれ以上は口……いや、脳自体が思うように機能しなかった。

\*\*\*

私と苅野さんはあの時間いていた。偶然職員室で出会って偶然話しかけられて偶然気が合って偶然そこで話し合っていた時、二人の生態系担当の教師が慌てて会話をしているのを、聞いてしまった。

「こ、これって、まさか——」

「ああ、存在外の集合体……——イレギュラーだッ！」

「で、でも、ここの反応……って、まさかッ!!」

「そつだ。調べた所だが、三年二組の教室のカギがまだ返されてない! 誰かが残っているという事だ! そして、この反応場所は」

「——三年、二組……です」

ソレを聞いた瞬間、心が不安になった。苅野さんと話をして、三年二組に誰がいるか解ったから……。い、いや、違う。別にアイツの事なんて如何も思っていない。……と思う。

でも、そんな事思う前に私の足は動き始めた。暖かいから職員室の隅っこで隠れて話をしてた私が。

先生の騒ぎにまぎれて職員室を出た。

リミッターを解除して、通常よりも感情的になっているのを押さえるように学校の階段を上がろうとした時、そこには苅野さんが既に立っていたんだ。

苅野さんは言った。

「一人で何処行くのかなあ、あははははあー。——私だつてとつくに心臓を捨ててるんだよ?——木崎さん」

生体系の先生が取り乱すほどのイレギュラー、つまりポルターガイストが起きてる。それは助けるために怪我するかもしれない。

だから私はその時言った。

「心臓は言い過ぎかもね?」

二人で心が通い合い、二人であの三年二組に残っているあのバカを助けるつもりだった。

だったのに。

——神様、教えてください。

——何で……。

——どうして……。

「し、心臓は大袈裟って……はは……——違うんだね」

——どうして、こうなるの?

三年二組の教室で悲劇は起きた。

#### 四話「其々の視点と心臓悲劇」（後書き）

読んでくれて有難う御座います。

今回の失態は、詰め過ぎた事と行き成りすぎた事。

今回の成功は、これで次回が面白くなってくれるかもしれない事。

ホント、急展開ですが次回も読んで下さる事を願います。

愛読有難う御座いました。

存在外の集合体、AIM拡散力場と殆んど変わらない気が。

## 五話「戦闘と死亡」

この場に苅野が居なくなつた時だ。

瞳孔が開くかのように空気が裂け、そこから一人の少女が現れた。右手にピン球程の黒い玉、左手に禍々しい鎌。少年漫画で死神が持つていそうな巨大なソレを軽々しく持つていた。

そして、そいつは言った。

「おにいちゃん、仲間……エレン、探してたの。私の目標、貴方を倒す事だけだし」

何も返す事が出来なかった。突然の出来事もあるが、下手に刺激するとマズイ気がしたからだ。

「それにしても、この世界のゴミさん達はよわっちーよね？おにいちゃん。自分たちが作ったのに私たちより弱いなんてね？ホントゴミさんだよね？あ、ゴミに失礼かな！？ゴミさん達も多分言ってるよ——」

ニタリ、と裂けるような笑みを浮かべて、

「——人間なんかと一緒に嫌、ってね？」

「——ッ！？」

そこで、見失っていた点に気が付いた。コイツが常に自分を複数系で呼んでいる事。そして、

「血……」

その鎌にまだ新しいと判断できる血が滴っている事。

「おにいちゃん」

人間の、血だと思った。

「おにいちゃん？どーしたの、そんな顔して？……どーしたの？おにいちゃん。顔が怖いんだよー、エレン怖いよー」

そこからは我を忘れていた。

気が付けば床に学級日誌を落として、カギについているクラスの名札にヒビを入れて、

——今。

殴りかかるうと身体を前に走らしている。

「コノヤロオ！！！！」

少女と距離を縮め、軸になる左足で大きく地面を踏み、腰をバネに捻らせた渾身の右パンチ。

「やめてよ」

ソレは小柄な少女に当たる事は無く、俺の視界が無理矢理左側に変更されると同時、体制を崩して転倒する。周りにある机や椅子と共に俺の身体は滑った。

「そんな攻撃当たらないんだよー、おにいちゃん？エレン簡単に避けちゃった！褒めて褒めて？」

「——く、クソ……」

何時もこうだ。

皆が力を手に入れるから、こうなる。力を手に入れたヤツは手に入れない弱者をいたぶる。勿論反抗なんてしても意味が無い。だって、こうなるんだから。

ある時は泥まみれ、ある時はびしょ濡れ、ある時は複雑骨折、ある時は晒し者、ある時は……。

強者が嫌いなんだ。弱者をこうする、強者が……俺は大嫌いなんだ。

木崎だって、警察だって、その他の善人だって、俺から見たら……

……強者なんだ。

強者は……嫌いだっ！！

「——ハーヴェイ・サテライツ」

ボソリ、と少女が呟いた。

「サテライツは人工衛星。ハーヴェイは力ある者。コレに共通するのが私たち。人工衛星の電波から生まれた力ある者。決して「存在外の集合体」なんかじゃない。同じようで違うの。だって……——力を持ってるんだもの？」

「……だから、何だ……。それを、弱者の人間である俺に言って、

どうなる……？」

良く見れば鎌で肩を切られていたらしい。浅くではあるが、肩から赤い鮮血が流れている。アイツが、避けたときに切ったのだろうか。

「それは違う。おにいちゃん、貴方はそうじゃないの」

呼吸が荒くなり、喉の渇きで声を張り上げられない。少女の声にも徐々に反応できなくなっていく。

「おにいちゃんはね。私と——同じッ!!」

——来る、そう思った時は遅かった。

身体を起こそうとした瞬間に無数の机が宙に浮き上がり、物凄い速度で襲い掛かってきたからだ。

一つ目の机をギリギリ右に転がって避けたと思えば、今度は頭上から二つ目が降り注ぐ。

ゴガギッ！ 両腕を組んで守りの体制に入ったが、俺の細い身体は机に当たり悲鳴を上げた。左腕が奇妙な方向に曲がっている。

激痛。痛い。痛いけど。

「避けないと、死ぬ」

左腕は使い物にならないと解った。手が動かず、感覚すら薄れている。

「まだまだ行くんだよ！おにいちゃんは生きてちゃ駄目なんだから!!」

三つ目と四つ目は同時に来た。プレスするように左右から襲い掛かってくる。位置的には、しゃがんでも当たりそうな位置……かといって前に転がったら隙ができてしまう。

打開策を探しに周りを見ると教室はグッシャグシャに成っていて、目の前に一つの動かない椅子。

「あれだ!!」

グオン！ という風を切る音が近付いてくるのを感じた直後。

「うオおおおおおおおッ!!!!!!」

身体を無理に動かして目の前の椅子を踏み台にし、高く飛んで机

をかわす。

ガッシャーン と、足元で机同士がぶつかって潰れたのを確認したあと、この軌道を鎌の少女に向かわせた。

このまま行けば、攻撃できるッ!!

「コレが弱者の一撃だクソツタレッ!!」

残り五メートル。四メートル、三、二……いけるッ!?

「オアアアアア——ッ!？」

ザクン。

距離、0.5メートル。

俺は宙に浮いたままで、その姿を月が照らす。

「——アがッ!？」

「おにいちゃん、粹がつてるのはいいけど……——相手をわけまえてからしてね。まさかこんなに弱いなんて、エレン屈辱的」

左胸に貫通するどす黒い刃は、俺を串刺しにしているのにピクリとも動かなかった。

唇から大量の血液を流し、意識が朦朧とする中。

——窓ガラスが、俺の後ろにいる二人の少女を映していた。

「か……、き……さ、き——」

「おにいちゃん。どうやらゴミさんが加戦しに来たみたいだね。もう遅いのに」

二人の少女は目を点にしていた。意味が解らないような顔をしているのが、反射するガラス越しに解る。

苅野と木崎。

「に、げ……ろ」

俺はゆっくりと目を閉じ、意識を切断させた。

「し、心臓は大袈裟って……はは……——違うんだね」  
少女の言葉は一人の少年の脳に通じない。

## 五話「戦闘と死亡」（後書き）

愛読有難う御座います。

ドシヨッパツから変な方向進んでしまつて申し訳ありません。  
これはプロローグのようなものですので（と言ひ訳を試みます）。

それでは、有難う御座いました。

## 一話「無傷と涙」

左の窓から風が吹いている。

私の座る席は教室の左から二番目。つまり窓側の隣。その上から四つ目の席に私がいる。この席の周りには仲のいい女の子はあまり居ない。というか前も後ろも勉強熱心な子だから声かけれないのだ。ははは……。

「むう」 頬杖をついて、私なりの嘆息。

何だろう。それが理由で、喋る人が居ない理由で、一度彼に声をかけたただけなのに……、今は凄く寒い。左側がとっても寒い。かといってソレを意識し続けると目頭が熱くなって、本当に私らしくない感じ。

でも、すごく楽しかったなあ。一回喋るともう一回喋りたくなるくらい。なんか友達感覚で異性に話しかけたのは慣れ慣れしいかな、とか不安だったけど、返事来た瞬間にそんなのが消えてしまった。

……もう一度話したいなあ。

「里堆くん……」 あ、違った。さっちんって呼ばないと。

そんな感じで隣を見る。勿論、彼は居ない。

「里堆くん……」

どうしても、さっちんって呼べない自分が居る。理由は解らない心では呼べるんだけど、今は声に出して呼べない。呼ぶと恥ずかしいというかなんというか……いやあ、全く私らしくないですなあ。

暫く空を見上げていると、すぐにチャイムが鳴った。教室内の生徒達は席を立てて室内を移動する。

すると、右側に居る「捻くれオタク男子」と呼ばれている三人グループの会話が耳に入った。

「おいおい、聞いた？里堆の事」

「ああー、聞いた聞いた。通り魔に襲われたんだって？ザマアみやがれっての」

「だよなー、あんなリア充やられればいいんだよ、スカつとするぜ」  
「しかも少女に襲われたんだろ？ハハハッ！軟弱じゃん！情けね〜」  
……さっちは軟弱でも情けなくもない。

「っーかあれだな。アイツ木崎たん怒らせて学校半壊させたりとか、やってる事滅茶苦茶なんだよな。あー嫉妬嫉妬。いつそ死んじまえばいいんだよなー、はははッ」

「——ッ——！」

ソレを聴いた瞬間、あの時の光景がフラッシュバックのように繰り返された。

ドアを開けたらさっちんが心臓を刺されていた事。

刺した少女に何も出来ないまま逃げられた事。

床に広がる禍々しい血の光景を見た事。

私が無力だから、あの時に走って逃げてしまったから、だからさっちは……。

さっちは……。

バンッ！ 気が付けば両手で机を叩き、立ち上がる身体。

「里堆君は軟弱でもないし死んでいいような人間じゃないよッ！！」  
何故か大声を張り上げていた。……何で私こんなに熱くなってるんだろ。多分クラスメイトを侮辱するのが許せない、っていう綺麗な怒りじゃないと思う。

横でビクリしている三人は、そのまま何処かへ消えていった。

私は立ったままチャイムが鳴るのを待った。

左側が寒い。

\*\*\*

「い……いれは——ッ」

応急用緊急手術の一室で担当の斉藤さん<sup>リーダー</sup>が手術中に驚きの声をあげた。切開した胸元を見て驚いているらしい。

「何なんだ、コレは……」

周りの助手も目を点にしていたり絶句していたりと、驚きを隠せない状態だった。

今手術している患者は中学校の少年。尋常じゃない大きさの刃物で胸を一刺しされたらしい。ほぼ助かる余地がないのだから、皆が体内のキズを見て驚くのも当然だろう。と思いながら彼の切開された胸を見ると、

「……………、は？」

即死レベルで刺されたはずの心臓は、何事もなかったかのように動いている。

\*\*\*

あの事件から十数日の、卒業式前日。

三月の中間で皆は高校でも殆んど一緒だからか、登校する生徒達は皆笑顔だった。かという私はイロイロあってあんまり晴れた気分じゃないけど、門に足を踏み入れると何故か心が落ち着いた。もの凄く、落ち着いた。

下駄箱に着いて何時ものように靴を入れると、階段を慌てて下りてくる女性が此方へ向かってくる。

綻んでいるけど険しい表情で、整った顔と黒髪が羨ましい女の子

……最近友達になった木崎さんだ。

「おはよう！あやめっち！」 元気に挨拶！

「お、おはよ……はあ、はあ」 凄く息切れしてる。

でも、それなのに笑っていた。息切れしていても笑っていた。ここ十数日は欠席や遅刻ばかりで笑顔すらなかった木崎さんが、と

っても嬉しそうに此方をみていた。

それだけで、身体の毛がぶわーって逆立つ感じになった。今にでも足が動き出しそうで疼いていると、

「教室、行かないと遅刻するよ!」

木崎さんが笑顔でそう言ってくれた。私は「ごめんね!」とだけ言って全力疾走。

必殺階段二段飛ばし!

とか高揚しながら走って、スカートとか気にしてられないくらい走って、周りの生徒追い抜いて、ガララン!と、勢い良く教室のドアを開ける。

周りを見ないように極力俯きながら全力で走って、自分の席に着いた時。

左側が暖かった。

顔を上げ、今まで寒かった方向を見れば、

「おはよう、苅野」

私の中で溜まっていたダムが、その優しい声で潤む間も無く壊れてしまった。

前が見えないほど涙を流し、今日からまた「暖かい」学生生活が始まると思うとまた涙が出る。

「うぐ、あう、だ、助けられなくてごめんね、里堆くん……ぐずっ

泣き顔見られるの恥ずかしい。けど隠し切れない。泣きながらそう言つと、優しい声が耳を通る。

「……はあ、それは違っただろー苅野。ゴメンよりアリガトだって」「——ッ!? う、うわああああん!」

涙腺大爆発の号泣には、笑顔も混ざっていた。気が付けば抱きついていて、里堆くんの制服をびしょ濡れにしている。

あやめっちには悪いけど、少しこのままで居たい。

ゴメンよりアリガト……、ありがとう。

帰ってきてくれてありがとう、里堆くん。

一話「無傷と涙」（後書き）

愛読有難う御座います。

新章開始しました。

これからは意味不明だった少女の話を解読しつつ、リミッターを使った話をしていきます。

それでは、有難う御座いました！

## 二話「初めての高校生活と初めての体験」

心臓を刺される体験をしました。

そう言ったら俺には友達が居なくなるんじゃないだろうか。

頭が可笑しいと言われるし、そもそも刺されて生きているなんて稀過ぎて異能の生物だと思われてしまうからだ。だか、俺はその「刺されて生きていた頭の可笑しい異能生物」の類になる人だった。

まあ刺された事実は消せまい。ソレは認めよう。だが何故俺は生きている。医者もビツクリ。左胸から肩甲骨にかけて貫通していた俺の肉は傷すら残していなかったのだから。全くもって疑問が尽きない。

ま、そんな事言っても心底大体は予想できるな。ファンタジー漫画沢山読んでいた自分が推測するに再生という異能の力を所持しているか、あの少女が切った物質は一時経てば元に戻るか、だ。前者も後者も科学的に有り得ないがそもそも今俺が生きてる事自体有り得ないので可能性は否めない……。空を飛びたい気分だった（つまり投げ出したいって事）。

さて、そんな俺こと里堆経汰だが、ご報告がある。

「えーっと、高校生活始まりました」

多分、中学校がそのまま高校になるだけの卒業式に泣いたのは現在右斜め前に居る栗毛ボブヘアー可愛さランクS世間一般で言う美少女の類である俺の知り合いだけだと思う。因みに名前は苅野<sup>かりのみゆ</sup>深愉さんだ。とつてもとつても純粹で天然だと第一印象で分かった。

いや、そんな事よりさ。

「何でお前が居る訳？」 左隣の女子に言ってみる。

「何よ、悪い？進学の時クラス変更無しって聞いたけど一クラスだけ無くなるらしくてゴリ押しとしてこのクラスになったの」

嫌そうで結構笑顔という、挙動が解らんこの女の名前は木崎狭。きこきあやめ

この学校は中学と高校が同じなため、そのまま進学できてしまう高校なのだ。が、中学の校舎は七クラスで高校の校舎は六クラス制なため、七組に居た木崎達はバラバラになって其々のクラスヘランダムに入った訳だ。ちなみに我がクラス二組には木崎以外にも六人程七組の生徒が入ってきた。

「だが六分の一という確率でここに来るなんて……。しかも席替えた瞬間隣だなんて……俺の高校生活、期待すべきじゃないな」

「何ボソボソ失礼な事言つてんの？ぶっ飛ばすわよ」

「マジでぶっ飛ばしてくるから厄介なんだよな」

力の変更を五十倍に出来る美少女が突如ぶっ飛ばすわよ、と言ってくるのは俺の周りだけか？そういう俺は恵まれてるのか？死と隣合わせでも美少女と居れば恵まれ者か？

やばい、疑問が多い。一旦全て置いてしまおう（アイキャンフライ）。

「んでさ、なんでテメエは生きてるの？見たところ心臓一突きだった気がするんだけど」

「いや、それが俺にも良く解んない。刺される感覚はあったけど、いつの間にか治ってたって感じかな……」

これが高校生の会話なのだろうか。というか人間の会話なのだろうか。

「ふーん。で、あの少女誰？」

「しらねーよ。なんか「おにーちゃん」とか言われたり「仲間」とか「同じ」とか言ったり、なんか俺を含めてるみたいに「私たち」って複数系で言われたり……。うん。馴れ馴れしかった」

「——、そ、それ本当なの？」

驚きを隠せない表情で、もう一度確認を取ってくる木崎に「うん？」と言ったら。

「アレは人工衛星の張り巡らされた電波で生まれた生き物。今はハッキングとかされてないけど、一応あの子は生きてるらしい。で、

その子がテメエを仲間だとか同じだとか言ってたのなら……、テメエも同じ人工衛星で生まれた生命体って事じゃ……？そうすれば、肉体再生する辻褄が合うわ。「架空の生物」なんだから」

「……いや、そりゃ無いな。そもそも根拠が無い。俺は普通に生まれて普通に親も居るし。成長もしてるじゃん。力の変更だって使えない軟弱……」

いや、まてよ。俺が存在外の生命体、ポルターカリスト、ハーヴェイ・サテライツ、で生れたとすれば人間じゃないって事だ。あの機械は人間以外には反応しない……。やっぱり辻褄が合う？

……考え過ぎだ。そんなに上手く行くはずない。架空生物なら生長しないし、電波で生れたとすれば電波悪い所では生きていけないはず。それにサーモグラフィーでは体温写ったりするし、あの少女と同じ人種なのにこんなに入らしい訳ない。

「まあ、気にせず行きましょ。そろそろ授業も始まるわけだし」

「あ、ああ、そうだなー」

そうだ。特に気にしなくていい。たとえそうだとしても、俺は俺だ。俺以外の何でもない。

そんな事よりも、中と高の学校が繋がってるせいで冬休みすら無く三月の終わりから高校の校舎で授業だなんて……。

「理不尽だ」

それと同時に授業開始のチャイムが鳴った。

\*\*\*

三時間目の放課中。気付いたのだが、どうやら周りに勘違いされているみたいだ。

俺がサッカー部やってた頃の男子グループと仲良く駄弁っている時、友達の一人中島が、

「お前最近ホント付き合い悪いよなー。お前の顔なら合コンとかで充分遊べるのによー」

と言い出し、もう一人が、

「ちげーよ中島。コイツには木崎つつー嫁が居るんだろーが」

とか言った拳句、さらにもう一人が、

「え、いや、経汰には苅野じゃね？この前もなんかオタク三人に叫んでたし……あれ？」

と言い出した。「叫んでた」というのはいまいち理解に欠けるが、きつと俺が入院中の時だろ。と勝手に推測し、脳内の隅っこに入れたから、まず一言。

「何の事だよおいつ！」

俺は正しい答えを出したつもりだ。なぜ俺が木崎と？なぜ苅野と？俺はそんなフラグ立てた覚えはないし……。クソ！なんか嬉しいようで嬉しくない！一人なんて五十倍の力を持った女だぞ！？そしてもう一人は会話がたまに会話にならないアビリティを持った天然だぞ！？どっちもタイプじゃない！（ちなみに性格で選ぶタイプなので顔はあんまり範囲に入れないのだ）。そりゃ顔だけでいけばどっちも確実にアリだが……はあ、複雑な誤解だ。

いやー、そもそも向こうは俺の事そこまで気にしてないんだろうし、放っておくか。

\*\*\*

四時間目終了のチャイムが鳴った。

それと同時に、学校の生徒は購買やランチ券などを買いに教室から居なくなる。この流れに吞まれながら階段を上り、目指すは屋上……なのだが。

「さつきから何だよ」

「テメエこそ何よ」

俺の後ろを着いてくる人影を感じていた。言葉遣いから言わずとも解るが木崎だ。

「俺は屋上でゆつくりメシ食うの、お解かり？」

「私は屋上が好きなの、お解かり？」

ふん、俺の方が屋上に行く理由になってるじゃないか！と心で堪能した後、黙々と階段を上って行く。

俺の足音とほぼ同時にくる木崎の足音が何故か心地いいと感じてしまうのは変態の素質が……いやいや。ただ単に、こんな光景が平和だと思つて少し綻ぶだけである。と思う。

「それにしても、テメエは如何して狙われたのかしら」

「うん。今更だがまずそのテメエって辞めろよ」

階段を上げる足を一度止め、首だけ振り返つて木崎を見ると、何故駄目なの？と首を捻られた。ここで「駄目って……一般常識を弁えろ」とか言つたら「心臓刺されて生きてるテメエじゃ説得力に欠けるわ」とか酷く言い返されそうだから、オブラートに包んでこう言つてみる。

「辞めた方が女の子らしいよ、お前綺麗だし」

……ん。んんんんんん？あれ、コレって何か違う？ありや……。

何か間違えたとあたふたする俺と違って、木崎の反応は普通だった。顔や表情は普段と全く同じで、くるりと後ろを向いて長い黒髪を此方に向けた後、

「ああ、私用事できたから一旦戻るわー」

いつもと同じ態度と声で、

「まあ、一人でゆつくりしてれば？」

こっちに顔を向けないまま、

「じゃあね。き、経汰」

下の名前で呼んできた。

木崎は猛ダッシュで校舎の階段を駆け下りて行き、直ぐに居なくなつた。

「……………」

俺はこの前と同じで十秒あたり固まってから、口を開く。

「コレが新世代の萌えか……………」  
初体験だつた。

## 二話「初めての高校生活と初めての体験」(後書き)

ご愛読有難う御座います。

少しでも書き方を変えてみました。

モロ日常な場面に、少しずつ「今までの流れをおさらい」

みたいな感じにしてみましたのですが……、出来てたら嬉しいです。

それにしても、人工衛星サテライツの謎は絶えません……。

それでは、有難う御座いました。

### 三話「告白と可愛い女の子」

六時間目が終わりを告げた。月も明日で四月に替わり、ぽかぽかとした空気に包まれているせい、ハードスケジュールなこのカリキュラムに屈服する者はおらず、皆ニコニコで帰りの用意をするのだった。

ソレについて人間って単純だ、とか思う人間の俺は何処か冷めているのかもしれない。

現在の席は教室の左から2番目。窓側に一番近い男子の座席で、上から五番目かつ下から二番目に俺の席がある。ちなみに左側には三時の春空を眺めている暴力的美少女と右上には友達熊のストラップを見ながら綻んでる天然系美少女が居て、どちらも顔見知りな俺だが決してリアルで充実しているような人間ではない。さあ唱えようか、リア充爆発しろ。

そんな馬鹿事に呆けていると、ここからは割りと遠くにある教室のドアが開き、爽やかで昔からの知り合いである男子が顔をひよっこり出してきた。

「おーい、経汰くん、里堆経汰くん。ご報告ご報告ーっ!!」  
万遍な笑顔。

んだ?とそちらに目で合図をする。クラスの生徒も全員ソイツの事を見ていたが、そんな事もお構いなしに大声で、

「一年五組のアイドル的美少女、九重<sup>このえ</sup>さんがお前に放課後話あるらしーぜーっ!!」

前言撤回。リア充は爆発すべきじゃない。速やかに撤回だ。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』 男子も女子も、団結力高く叫ぶ。

おめでとう! 最高の高校生活じゃん! リア充死ね! などの声俺の耳を通る。

「お前何故叫ぶんだ!？」と説教をする前にソイツは教室から居

なくなり、盛り上がる生徒。

そして何より、後ろから殺しの視線を感じている俺。

「な、何で怒ってるんでしょかねー木崎さん？あっちはー止めてくださいよその汚物をマジマジと見るような目つき」

後ろを見れば、虎が竜を見るような冷たい目線をおくってきている美少女が居た。睨まれる理由は解らない。きっと気に食わないんだろっ、と勝手に把握した後、

「別に怒ってないわよ。さっさと美少女の下へ行つて来たら？」

皮肉交じりに言ってきた。

「い、言われなくとも行つてきますよー、ははは……——つて、なぜアンタもそんな目してるんだ！？」

目線を黒板側に変えると、今度は斜め前に居る苅野の「え？何やねんお前？」みたいな目が俺を突いている。

「そんなに駄目か、そんなに俺は美少女に絡まれるのが駄目なのか！？」と心で叫んでおく。

「里堆くん……告白されるの？」 いや知らねえよ！？

てか何だよ苅野その潤んだ目は！まるで飼つてた鳥を野生に逃がす時のように悲しげな目つき！

「わー、わ、私もそういえば九重さんに用事があつたんだよねえー、ははは」 嘘だ！

何だよこいつ等ツ！何で間接的に俺の青春を妨害するんだ！？鬼か！中学生か！嫉妬か！

というか俺心でめっちゃツツコミしとる！何かキャラ崩れとる！落ち着け俺！

「こ、コホン。えーっと、まだあれじゃん。あのーうん、あれだよ告白とか決まってるないだろ」

苅野にそう言つと、周りの生徒が「鈍臭っ！」とか「鈍感……」とか「うわあー」と冷たい目線をおくってきた。何だろっか、事実を言ったのに軽蔑されているような……。

「で、どうするの？」

そんな中、話をまとめる様に木崎がそう言った。クラス全員の視線も木崎に集まる。

「いや、如何するのと言われてもですね……」ど、如何しましうう？」

質問を質問で返した。

「如何って、聞かないでよ……。そりゃ九重さんは成績優秀で顔もいいって言われてるし、テメ——いや、経汰に好きな人とか居ないなら付き合ってみるのもいいかもね」

木崎が冷たく言うと、クラスのメンバーは「うんうん」と一致団結した。苅野は「何故下の名前……」って言いながらカビヨンとなつてたけど、気にしない。俺も聞きたいくらいだ。

「好きな人……うーん。今は居ないけど」

俺が言うと、クラスの全員が「なら付き合えよ」と言い返す中、苅野は「里堆くんと何があつたのあやめっち!？」とか言っているが、やはりスルー。俺も聞きたいくらいだから。

「なら付き合えば良いんじゃないの？それ自体苦ではないだろうし、何も無いのに断ると向こうが傷つくかもしれないし……」

木崎は何故か告白を了承するように勧めてくる。というかまだ告白して決まってるだけのけど……その辺は口を慎もう。

「で、でも……良く解んないだろ。仮に付き合うとして——」

「つーか、私に相談しないで自分で考えたら？何で「く」だろ」とか「仮に」とかさつきから私に意見を求めようとしているの？そう言う所、男として情けないわ……。はいかいいえでハッキリ答えなさいよ」

わー、お母さんみたいに説教されました。そしてご機嫌斜めのよななので……。

「……ああ、ゴメン。んじや自分で決めるよ」

でも実際、頼ったのは事実だな。と反省しつつ、へなへなしてる苅野を横目に木崎にお礼を言うが、返事は返って来なかった。何か周りの態度が可笑しいような気がした。

\*\*\*

帰りのホームルームも終わり、いつもと同じペースでいつもとは違う場所へ向かう。普段は校舎を出て左に行けば帰りの門を通過できるのだが、今回はその逆に向かう事になった。

右に曲がって真っ直ぐ行くと体育館に着くのだが、そこから右に曲がってまた突き当りを曲がれば、

「ここ……だよな」

【空の間】という公園のような広場に到着する。

ココに呼ばれたのは他でもなく、九重さんに呼ばれたからなのだが、

「あの……」 直ぐに見つかった。

後ろから声をかけられ、身体ごと振り返った時、

「さ、里堆君……。あの私、ちゅ、中学の時から貴方が好きでした」  
そこには、絵に書いたような美人が居た訳だ。本当に貶す部分が見つからないくらい。清潔感もあって、いかにもお嬢様で、赤くなる顔とかも男から見ればドツボのような人だ。

「よければ……私と付き合ってください」

それは俺の期待を裏切る事の無い、真剣な眼差しで送られた告白だった。

黄昏をバックにした姿は、きっと町行く学生の足を止めるだろう。

\*\*\*

でもなあ……。何で俺なんだろう。

現在、自宅への帰り道で呟く。九重さんをさつき家まで送ったのだが、驚く事に俺の自宅と殆んど同じ場所だった。それでも今は六時で月が出るくらい暗くなっている。

あー、それと、俺と九重さんの家の近くには一つの小さな公園がある。何故今この場面でそれを説明するのかと言うと凄く言いづらいのだが、やっぱり言うしかない。

「待ち伏せですか」

「聞き捨てならん言い方よね」

ご覧の通り。言いづらいのはその公園に知っている人物がブランコをギコギコしていたからだ。誰かと言えば、やはり言わずとも解るであろう木崎だった。そして何故か向かいのベンチには私服姿の苅野も居る。

「はぁ……お前らの家この辺だっけ？」

溜息混じりに言々と、木崎はブランコを緩くこぎながら、

「直ぐ近くよ。そんな事より——九重さんとのラブラブデート楽しめた？」

「げっ、お前……まさか見てたとか？」

「だってこの公園から丸見えじゃない、九重さんの家」

そっぽを向きながらそう言っている。苅野はといえば目をまん丸にして口をポツカリ開けている……返事が無い、ただの屍のようだ。「随分と会話弾んだみたいよね。この時間帯に帰ってくるとは、相当寄り道したと見るわ」

「……鋭いっすね、今日の木崎さん」

「はぁ……やつぱり。まあ付き合うのを勧めたのは私だけど……」

「あー、それだけどさ。俺——断ったよ」

ソレを言った瞬間。木崎のブランコをこぐ足が止まり、魂を抜かれていた苅野が元に戻り、二人の視線が同時に此方へ向けられる。

「い、いやぁ……お、怒らないで聞いて欲しいのですが、俺にはあの人合わないというかなんと言うか……ほ、ほら。だってさ、俺が好きな人って個性あって自分の道を進んでる一生懸命な人だし、優

しいとかそんなごく普通の人と仲良くなったって面白くないと思うんだよ——って、あー、えっとそれは九重さんに才能とか個性が無いとかじゃなくて、やっぱり何かうん。その……うん……—まあ、そんな感じだ」

九重さんは、俺が断つたら「一日だけでも恋人になってください」と健気な事を言ったので今日一日だけ仲良くしていたのだ。うん。つまり断つたのだ。

「はあ……」 木崎が小さく溜息をして、苅野と目を合わせクスリと笑った。

そして「どんな感じが解ないわよ……」と言つと、苅野は「でも……」と言葉を紡ぎ、

「経汰らしいっちゃ、らしいわね」

二人のとびきりの笑顔は暗がりでも輝いている。

### 三話「告白と可愛い女の子」(後書き)

ご愛読有難う御座います。

古くからの友人にこの話を見せた時、最初からこんな感じでいけよ。そしたら読者引き付けられるんじゃないの?と言われてしまいました。た。

ですが全くもって自信が無いです。もつと上手くしたいんですが、やっぱり手を加えられないくらい精一杯で……。これからよろしく願います><

#### 四話「近親。姦と幼馴染」

女の子の住所という収穫を得た。うん、変態にしか聞こえない言い方だ。もつと紳士的に言えば、木崎と荻野の家が俺と近い事が解った。……いや、これも何か下心あるような気がするな。つまり俺こと里堆経汰は変態と言う名の紳士が。

……い、いやまで。良く考えるとソレはまずい。何か発展に発展を重ねて脱線した結果が変態と言う名の紳士とかもう救いようがないだろ……。と、思いつめた所で「過去は消せない」という言葉が脳内を過ぎったので死にたくなってしまふ。いつからこうなったんだ俺は。……いや、実際普通の男子の反応じゃないか？高校一年の春だ、そんな事もあるさ——って、俺はさっきから何に思考回してんだよ！

「はあ」

下らない事に時間を費やしたぜ とまあ勝手に話を纏める。

思考を今の景色に回せば、土曜日の休日ばりにのほほんとした家族たちの姿が伺えた。四月になったと言うのに炬燵の中で体を温めている姉やケータイぴこぴこ弄る弟。ソファで寛ぐ妹も居た。実は俺、五大家族です（テコ入れじゃないっすよ全然）。（あ、勿論皆リミッター使えます）。（カッコって便利だね）。

まあ休日とは言っても最近買った三階建一軒家のローンとかトヨタ社新型サーフのローンとか色々あるから両親は今頃仕事場で必死だ。

それに大して俺なんか絨毯に座って漫画を読んでるわけだ。今の高校がバイト禁止でよかった。……さて、ココで家族紹介でもしようか——、

「お兄いー、冷蔵庫のプリンとってー」

さて、早速来ました。妹の命令。コイツの名前は結愛<sup>ゆめ</sup>。子猫みたいなくりくりの目とクセのあるミディアムの髪が特徴……ぴよんぴ

よんはねて大変らしい。ちなみに中学二年生。

「はいはい」

立ち上がって過ぐ近くの冷蔵庫に手を伸ばし、スプーン付きぷちんプリンを取り出した後、ソファーに座って雑誌を眺めている妹にほいっと渡す。

「ありがとねーお兄ちゃん」

実はこの妹、俺や身近に居る男子以外にはかなり冷たいと言う……。全く女って解らない。

にこにこしている妹から視線を変えると、部屋の隅っこに居る弟の待虎が物欲し<sup>たいが</sup>そうに妹のプリンを見ていた。同じく中二で童顔男子のコイツ、男子版ツンデレのような人物。

「待虎、お前もプリンほしいのか？」

「はっ！？い、いや俺いらねーし！別に小腹が減ったとか思っ  
てねーよッ！——くそ！何だよ兄ちゃん！何だよその目は！？」

とっても面白いヤツだ。とか思いながら、俺はポケットにある力ロリーメイトを待虎に投げて渡した。

「まー、今はプリンねえからそれで我慢してくれ」

「……お、おう！しょうがねーな、も、貰っとくよ……。あ、ありがとうな」

結構可愛い弟だったりする。

何時もの平和な光景だと思いながら絨毯に座り、漫画を読もうとすると、

「おにーちゃんー、あーたーしーにも何かしてえー」

炬燵のある方からおっとりした姉の声が聞こえてきた。

「まず俺はお前の兄貴じゃなくて弟だ。それと言ってる意味が解らない」 とり合えずツツコミ。

「きゃー！冷たい経汰も素敵い」……我が家で一番問題児の姉だ。

「姉ちゃんが姉だなんて今でも信じれない」

ちなみにこの子は冷たくすればするほどよって来る習性がある。

かといって優しくすると調子に乗るのでドライで接している俺だった。ちなみに名前は葵<sup>あおい</sup>。高校三年。

「うわぁーん。お姉ちゃんお胸おつきいから肩こり酷いんだよー」  
豚に真珠……いや、天性の宝物？この女、容姿だけズバ抜けているが中身がコレだから駄目だ。

「だから揉めと？」

「うん。あ、お胸じゃないよ？肩だよ？」

「誰が好き好んで姉の胸なんか揉むか！んなこと解ってるよ！」

「ええー、経汰になら揉まれても——」 「言うな、もう言うな！」  
無視しよう。そう思っただけ漫画を手に取ると、姉はぶーぶーッとか唇を尖らせてからこう言った。

「経汰は私にだけ冷たいんだよぉー！結愛には優しいクセにーッ！このロリコン！」

「……なんだその微妙なキレ具合と最後の一言は。俺はロリコンじゃないし姉ちゃんは頼み事の度が過ぎるから冷たく接しているだけだよー！」

「うわー！必死になっちゃってー、やっぱりロリコンなんだぁー」

「ロリコンじゃねえよ！お前殺すぞ！」

「ギャー！経汰の本性出現ーッ！襲われるうー犯されるうー！」

「——つてめ！……はあ。まあいいや。俺ちよつとその辺散歩してくるから」

「デート？」 「デートだ！」 「え？デート良くのお兄ちゃん」

弟、姉、妹が同時にそう言った。もう本当に無視して家を出ようと悟った。

\*\*\*

凄惨な出会いをした。

家を出て散歩がてら歩いていた時、昔の知り合い（というか幼馴染）である人に合ったのだ。

久しぶりの出会いだったので現在はファミレスでその幼馴染と駄弁っているのだが、向かい側にいるその幼馴染の名前は河内愛月。かわうちづつきそして俺の隣にいるヤツが河内弾歩。かわうちはずむ二卵性の双子で、見ての通り愛月は女、弾歩は男だ。

こいつ等とは小学校時代、毎日のように遊んでいた仲で、中学で引っ越しして違う場所になって以来は一度も会うことがなかったのだ。

「いやぁーホントに久しぶりだね、経汰くん。小学校以来だもんねー」

笑顔でそう言う愛月に、だよなーと言って返事をし、暫く三人で他愛もない会話やアドレス交換をしていると、何か強い視線を感じた。

「ご注文は何でしょうか、お客様」  
ファミレス店員の態度悪い声が聞こえたので、不快にそちらを見ると――、

「――何してんだ木崎」

「見て解らないのバカヤロウ」

とっとと出てけ女垂らし。見たいな目線を送ってくる知り合い店員が居た。

俺の休日につくづく不幸だと思いつつ、その後一時間程度で河内家族と解散した。

#### 四話「近親。姦と幼馴染」(後書き)

ご愛読有難う御座います。

今回も日常です。ウルトラ日常でした。

一応家族紹介と幼馴染出しましたが、今後の出番は有るのか無いのか……。

うーむ。やっぱり謎です。

それでは、有難う御座いました！

## 五話「終わりと始まり」

日曜日が終わり、月曜日の学校が始まった。月曜日は朝に集会があるため体育館より広い講堂という所に全校生徒が集まる。そして背の順で並んだ俺の左側の女子列には惜しくも木崎が居るのだった。「切っても切れぬ腐れ縁」「何よ!」

いや、何でもない。とだけ木崎に言ってから委員長に「前習え」とかいう号令をかけられ、皆が両手を挙げ整列をする。前の人から順番に座っていき周りが静かになった所で、改めて生徒の多さに感動した。

すると、校長先生らしき人が講堂の舞台上がり、一礼をしてからこう言った。

「えー、生徒の皆さん。お早う御座います。肩っ苦しく長い話は無しにしようと思いますので、気を抜いて聞いてください。二、三年生の方々は知つての通りですが、五月に【学年序列決定戦】を開始します。ルールは至ってシンプル。クラス内の全員で其々配られた競技をしてもらいます。その中で一位と二位を決めてもらい、その二人をクラスの代表ペアにします。今度はその決められたメンバーで学年ごとに決められている協議をしてもらい、最後に残った一、二、三年生の生徒六人で対決をしてもらう、という事です。尚、この協議には力の変更が許されているので有効且つバンバン使ってくださいね」

ニコッと笑う校長に「冗談じゃねえ」と心でツツコミを入れた。「あーっと、競技内容はサッカーやらドッジボールやら色々あります。さて、これにて校長のお話を終わりにします」

ペコリ、とお辞儀する校長に湧き出る殺気を抑えきれないでいると、体操座りをしてる隣の木崎が「ふふ、潰してあげるわ」みたいな目で此方を見てきた。

俺は力の変更できないってのに……不運だ。

\*\*\*

運動神経は割りといい方だ。

五十メートル走六秒前半、

シャトルラン百十九、

走り高跳び百五十センチ、

浸水時間三分、

親の影響で球技経験は豊富だし、ある程度いける所まで行けた。

基本運動で苦手な事は少ない。

——しかし、しかし、だ。考えても見る。ソレは基本ステータスである。この現代では力の変更というものがあつて運動能力を向上させる事が出来る。運動量を通常の二倍にするだけで俺の力は越されるであろう。

まあ、とはいっても二倍じゃ足が速くなったりはしないらしく、力が少し上がるだけだが、それでも劣ってしまうかもしれない。その可能性は否めないのだ。

そんな超人だらけの世界で力比って、力の変更が出来ない俺はどう生き延びれば良いんだ？教えてくれよ神様仏様。俺は仏教も神教も良くわかんないけど。

いやこれは深刻な問題だろう。まだ四月の初めだ。あと一ヶ月と時間はある。今のうちに鍛えとくか——、

「里堆君、どうしたんだい！そんなに頭抱えてえー」 苅野がてくてくやって来た。

「か、苅野……うぐ、俺はどうすればいいんだ！このクラスには学校にクレーターを発生させる女とか居るんだ！なのに【学年序列決定戦】って……助けてくれーっ死ぬーっ！」

と、放課中に俺の席に来た女子にすぎる。おふざけではあるが頼

りなく助けを求めると、

「えーっとね。一応言っておくけど、リミッター所有者っていうのは、力を使い過ぎたりと体が壊れちゃうんだよね。元々脳は体が壊れるのを制御するために七割の力しか出せなくしてるのに、ソレを全開にするということは逆に言うところ「制御が無くなる」という事になるの。だから100%の力で相手を殴ると殴った人の肩が脱臼したりするんだよね。つまり、力を変更している人は皆90%ぐらいで戦ってるんだよ？勿論木崎さんも。もっと出せるけど、90%の力でやめているって事になるんだあー。だからさ、心配しないでいいと思うよん！」

といいながら机に突っ伏す俺の後頭部をポンポンと叩く苅野。顔が机に当たって痛いからやめて欲しい。

「……いや、それでもクレーター作る事実は変わらなくて？」 顔を起こして言ってみた。

「あ、そっかあ」 首を傾げる苅野。

つまり結局俺が危険だという事実は苅野の意見で揺るぐ事はなかった。という事で、集会が終わり俺の「死」と言う名のタイムリミットと【学年序列決定戦】は残り一ヶ月と二日になった。

隣を見れば、木崎が飛び切りの笑顔で自分のカレンダー帳に斜線を引いている。そこには、残り一ヶ月と二日（ハート）と書いてあり、背筋が凍った。

——これから如何しよう。

心の叫びは誰にも聞こえない。

「日常の中の非日常」

ソレは、集会が終わって俺の地獄への三十二日が始まった「終わりの始まり」。

## 五話「終わりと始まり」（後書き）

ご愛読有難う御座います。

コレにて一章の一節が終わりました。短かったような気がします。次回からはやっとタイトル+メインのリミッターを使った話をします。

失礼ですが、誤字脱字があればご報告お願いします。

それでは、有難う御座いました。

## 「話「大会開始と殺人玉投げ」

しまった……。と賑わう教室で囁く。俺とした事が……。――何もしないまま五月になっちまったあアアアアアッ！！！！」

俺何っーお馬鹿プレイしてんだよ俺はドジッ子じゃないんだよ普通に学生生活送ってただけなんだよだから鍛えてないし対策法も煉ってないんだよッ！！

っーか心で叫んでも意味ねーよ！

「今日この時をどれだけ待った事か……――あー、経汰。朝から元気ね……っふ」

「おい木崎てめえ今最後らへん鼻で笑いやがったなこのアマー！！」

「五月蠅いわねえ、先に捻り潰して出場停止にするわよ」

「んだとコラーッ！てかやつぱり「先に」って言う事は俺をボコボコにするって前提じゃねーかゴルァー！」

「そうよ」「開き直るなッ！！」

うがー！と歯をむき出しで襲いかかるうとしたが、二人の男子生徒が俺を止めた。

木崎は俺が暴れているのを横目に、生徒が全員出席しているこのクラスを眺めて「皆ヤル気満々ね」とか呟いていた。途中で苅野がこちらを見て「まあまあ」みたいな励ましの視線を送ってくれたが嬉しくない。俺は今すぐ此処から逃げ出したい気分――、

「そんなに嫌なら休めば良かっただろ！」と俺を止めている男子が言った。

「その発想は全くなかった」激しく後悔。一ヶ月遡ってインフルエンザにもかかりたい気分には苛まれると同時に、現実を受け止める事にした。

「はあ」と、溜息混じりに言葉を紡ぎ、

「しゃあねえな。もう駄々こねたって意味無いし……」右腕をゆ

つくりと上げていく。すーっと、上げた右腕が垂直になった時。酸素を多く取り込んで

「宣言だ、——俺がクラスのトップになってやるっ！」 つま先で立つても無理な一言は、クラス全員の闘志を逆立てて燃やして戦場へ駆り立てる。

《三、二、一、——それでは、学年序列決定戦を開始します》  
こうして、校内放送と同時に地獄は幕を開けた。

\*\*\*

体操服に着替えて開始の合図を待っている。

一年二組のクラス、最初の種目は『玉投げ』だった。場所は学校の現在使われていない旧校舎を利用。ルールは、旧校舎内にある「玉入れ用」のボールを投げあうというもの。三回当てられたら脱落になり、専用のボールならどこに落ちているものでも投げていいらしい。因みに顔面は無し……——というものは存在しない。というかそんな甘いルールはない。何せ、この旧校舎には沢山のトラップが設置されているからだ。それを回避しながら玉も回避してライバルを当てなければならぬ。

因みに当てた数は関係ないらしく、最後に二人生き残ればいいのだから「逃げ続ける」という手もあり、前まで普通に活用されていたデカイ旧校舎でそれは全然可能だった。

まず、定位置に着く。どうやら俺は第三理科室に居るらしく、木造の人体模型が寂しく隅に置いてあった。因みにこの校舎は部屋が四十個以上あるため、最初の位置は一人一部屋らしい。周りを見ても当然此处には誰も居ないが、よく見ると床に赤と白の玉が沢山転がっていたので数個ポケットに入れた。

さて、後は旧校舎の放送を待つだけ……。と思っていると、思った

時とほぼ同時に、

《第一科目「玉投げ」を三十秒後に開始します。尚、反則や脱落者、その他の情報はこの放送で知らせますのでご了承願います。それは……三、二、一、——スタートです》

——瞬間。

ガララァンツ！ と、一斉にドアが開く音があったと同時に、生徒の声（というか雄叫び？）が四方八方から聞こえてきた。

地図によれば、俺の今居る場所は校舎の二階の隅っこだから結構安全だ。——しかし、その分誰かに来られると逃げ場がない。どうにか此処を逃げ出したいが、廊下では「リミッター所有者」の凄まじい攻防が繰り広げられていて出れそうにもない……。

《脱落者二名出現。飯島、細動》 機械アナウンスが心を込めずにそう言った。

どうやら苗字だけで呼ばれるらしい。それでも恥ずかしいな、こんな早くに脱落って。すると、

カツカツ……と言う足音が迫ってきているのを耳が感じとった。

ドア付近に居た俺はすかさず近くの「実験用テーブル」の影に隠れる。実験用テーブルとはグループで囲むように座る、あの黒い机だ。その足音の予感は見事に的中した。此処からでは見えないが、理科室のドアが開く音が鼓膜を叩き、俺に悪寒と汗を与える。ポケットから玉を取り出し、強く握って深呼吸。

三、二、一の合図で突撃だ。手元にある四つの玉で確実にし止めなきゃ、確率は薄い。

ミスしたら負け。負け。負け。……三。

生徒の足音はドア付近の此方ではなく、その反対の窓側へ行っているのが感じ取れた。

行ける。そう思う。残り……二。

……一。

今だッ！！

ガバッと立ち上がり、窓側付近に視界をやれば女子生徒が居た。警戒していたのか此方の様子に直ぐ気が付き、直ぐに腕に装着してあるリミッターを見ないで操作した後、床に落ちているボールを拾おうとする。

「遅いッ！！」一喝し、前に走りながら勢い良く玉を投げる。野球経験がある俺の玉は——軽々しく避けられた。

「遅いのはどっちですかッ！！」

女子生徒は玉を拾ってしゃがむ軌道をそのまま利用して一回転したらしく、気が付けばもう立ち上がっていた。

これが、リミッター解除状態。ハーウェイモード

大人しげな女子生徒は、並ならぬスピードで左右に電光石火しながら且つ、俺との距離を埋めてくる。

「嘘だろッ！？」

恐怖というよりも驚愕だった。まさかの展開で玉は残り三つ。もうミスは許せれないし、それ以前に狙われる。やられる。当てられるッ！！

「おわあッ！？」

凄いスピードで赤い何かが横切ったのを確認する間もなく、俺はすかさず後ろに転がり、その体制を維持したまま左に曲がる事で、机の影に隠れることが出来た。

ここで体を整え、一秒も経たない間に走り出す。

——目指すは廊下。

目指すは——逃げるが勝ち男ッ！！

## 一話「大会開始と殺人玉投げ」（後書き）

ご愛読有難う御座います。

さて、学年序列決定戦が始まりました！

なんと、上位入賞者には一年間ランチデザート無料券や図書券、その他役立つものが貰えます！

という感じで行きたいと思います（笑）

主人公には、是非頑張ってもらいたいです。あとテンポの方ももう少し良くしたいなあ。

頑張ります。

それでは、有難う御座いました。

## 二話「宣言と約束」

全力で廊下を飛び出した。足を動かしたまま振り向けば、まさかの展開に女子生徒が目を点にしている。それでも此方に向かってこようとしている所に驚いてしまう。

全速力で走ると、直ぐに右に曲がる事が出来る。これを曲がると階段だ。

「うおおおおッ!？」

逃げる俺に気が付いた廊下の男子生徒一人が、俺目がけて玉を投げてきた。ソレは走っている俺の目の前を高速度で横切ると同時、壁にぶつかって破裂した。中身の布がヒラヒラと散り、床に落ちる前に階段に到着、すかさず下へ逃げる。

「クソ、こんなの拉致が明かない!」

タタタタターツと俺が階段を降りる足音に続き、もう一つの足音が鳴っている。誰かが着いて来ているらしく、冷汗の放出量と階段を下りる速度が脊髄的に増した。逃げるしかねえのは解るが、此処まで追われると逃げるだけの自分が情けなく感じ――、

「――おわっ!？」

叫ぼうとした声は裏返し、瞬間に俺の視界がグルリと九十度変わる。

――扱けた。

違和感を思う前に俺の体は転倒し、ぐわんぐわん縦に回って体中を痛みが蝕む。ゴトゴトと階段を転がりながら、さっきから流れているアナウンスの一つが偶々俺の耳に入る。

《階段油トラップ被害者発生。里堆、椎名》

不本意に扱けた俺の体は、階段を転がり踊り場に到着して、その動きを止めた。

「アが……――ぐッ!!」

防具として最新鋭の薄型クッションが入っている専用体操着だが、

その痛みはそれの上からでも充分に伝わってきた。頭を守っていた腕に激痛が走る。

階段を転がって地面に倒れたと気付くのに何秒掛かっただろうか……。隣で、さっき追いかけてきたであろう男子生徒の椎名が同じトラップで気絶しているのを見ると、俺は軽傷で済んだと把握。同時にえげつないトラップだと思い奥歯を噛み締めた。

巨大な力ボチャでも背負っているように重い体を起こし、立ち上がる。未だに視界は淀み、ふらつく足に渴を入れて、一步一步を踏み出す。

どうやら一階に着いていたらしく、真っ直ぐ行くだけで廊下に着くことができる――

「――な、なんだ……これ」

静かだと思っていた廊下を覗けば、そこには無残な光景が広がっていた。

倒れている二十人ぐらいの生徒。そこに佇む、一人の少女。

俺に背中を向けたまま手に握る白い玉をポンポンと持て余して、逆の手は腰に当てている。長い黒髪が旧校舎の窓から降る光を反射させ、光沢を生む。そんな細い体の少女は言う。

「生きてたんだ、経汰」 木崎狭だった。まるで廊下に転がる約二十人の生徒を、捻り潰しました。と言わんばかりの態度で振り向きもせずに言った。

「アンタみたいな弱者、普通はとくに終わってるわよ。私の予想では、開始五分の今で脱落してない人間は五、六人つてとこかしら……」

呆れながら言う木崎の後ろ姿に反抗するよう、俺は口を開く。

「言っただろー？俺、トップになるんだよ。勿論このクラスだけだけど……」

五、六人程度しか居ないのは正論だと思った。実際ここで二十人くらいが倒れていて、上でも早速全員暴れていたのだから……。何より、階段から追っ手が来ないのがそれを証明している気がする。

「トップ……ねえ？笑わせるわー、絶対無理よ。私が居るもの」  
「んーでも俺はトップになるんだよ、根拠ねえけど。宣言しちゃったもん」

「……はあ。経汰は偶然脱落せずに済んだのかもしれないけど、私は実力。実際にこいつ等、私を潰す為に協力し合って襲い掛かってきたわ……」

木崎は女子の中でもずば抜けた力を所持している。見かけは細い女の子でも、このクラスの連中は容赦が無かったのだろう。声で木崎の曇った顔が解ってしまい、倒れている連中に何故か「最低なヤツ等だ」思ってしまった。

「私はトップなんか欲しくないのに」ボソリと言った一言は、俺の耳に微かにしか聞こえない。

「まあ、でもやっぱ俺はこの勝負に勝つぞ。絶対トップになる」

「だから……経汰じゃ無理よ」

「無理じゃない。きつとなってやるよ。後五、六人だろ？」

「それでも無理。私が居る」

「無理じゃない」

「無理」

「無理じゃねえし！」

「何が根拠にそんな事言えるのかしら？」

「一度言った事には筋通さないとイケないだろ？ソレが原動力」

「ふざけないで！」

木崎の黒髪が揺れて、その顔が此方を向いた。同時に体もこっちに向けると、十五メートルの距離は何故か近くに感じた。

「何が……何がトップよ。それで何になるっての」だから宣言しちゃったんだって。

嘆息して、鋭い目で此方を睨み、

「私がソレを阻止する。私は常に経汰の上に居るべきだと思うから、阻止する」

「ふうん」 適当に返事をして、言葉を紡ぐ。

「言つとくけど。いざとなれば俺、絶対に容赦しねえから」

コイツとの戦いは、残りの生徒を潰してから。その後絶対に倒してトップになる。

「……解らない。その現実を見ない自信は馬鹿を正しく表現してるのかしら」

「しらねーよ。じゃ、また会おうな」

約束のような事を言つて、そさくさと来た場所へ走る。これで当てられたらもう俺超恥ずかしいじゃんと思つたけど、木崎は追つてこなかった。一安心して、階段を上る。

目指すはトップ。逃げて隠れて卑怯な手を使つてでも、俺はこのクラスのトップになる。

弱者の小さな宣言だった。

## 二話「宣言と約束」（後書き）

ご愛読有難う御座います。

テスト期間中で更新が途絶えています。が、頑張っ  
て更新して行こう  
と思います。

それでは、有難う御座いました。

### 三話「卑怯と変わる」

階段を上がって二階の廊下を覗く。

「ふう……」

誰も居ないのを確認し、三階へ移動する為に階段の手すりを握る。木崎と離れてから二分しか経っていないのが信じられない程、時間の流れが遅い。手すりを握る手は汗でべっとり濡れていて、それが今の自分の感情を強く表していた。

ゴクリ、と息を飲んで、三階へたどり着く最後の階段を踏んだ時、ザヒュン！ と、耳元で風を切る音を感じた。前にある教室の壁に穴が空き、昼の光が差し込む。その様子から後方からの攻撃だと察し、振り向いた刹那――、

「しま――」

向いた瞬間。目の前にはもう男子生徒が居た。拳を握り締め大きく腕を振りかぶり、申し訳無い謝罪と勝利を得たい欲望の表情で、俺目掛けてソレを振り下ろす。

ゴリイ、生々しい音が腹で鳴り、その場所から感じた音より後で激痛に浸る。体が吹っ飛んで廊下を数メートル滑り、教室の壁に背中ごと叩きつけられた。痛みで叫び声を出したくない、出せない。

「す、スマンな……俺、勝ちたいんや。そのためにこの学校選んだ訳やし。生憎チエックメイトや」

「はは……そうかい」

情けないな、と感じる。トップになるとか、アレだけの大口を叩いてまだ三十分も経過してないのにもうこの様なんだから……。きつと、動けない俺に優しく三回玉を当てるっつー考えだろうけど……ソレをされるのが一番情けない。何なんだ俺は、何がしたい？ 宣言をノリでたくせにあっけなくやられて。

――言った事には筋通さないといけないだろ？  
クサイ台詞を吐いて。

——いざとなれば俺、絶対に容赦しねえから。  
調子に乗って。

——ふざけないで！  
怒らせて。

——じゃ、また会おうな。  
約束までして。

「本当にスマン、スマン。コレで終わらせとくから」 玉を取り出  
そうとする男子生徒。

動けない俺は弱者。相手は力を変更できる強者。格差万別？優越  
劣等？矛盾している世の中だ、と動けない体に伝える。肋骨がギシ  
ギシと痛んで、唇は切れている無残な体に。

……確か最近にもこんな光景があった。あの夜、心臓を刺された  
夜。俺は弱者だと言って強者を嫌い、ヤケクソで我を忘れて突っ  
込んで……刺された。きつと、そのせいで余計に強者が嫌いになっ  
たのかも知れない。……でも、何か違う。日常を経て、そう思った。  
退院や無事を泣いて喜んでくれる友達や、こんな俺でも好きになっ  
てくれた女の子、何一つ変わりなく接してくれた幼馴染や先生方、  
その他、家族。それを見ていると、それを嫌う今の自分が馬鹿らし  
くなって……とか言いつつその邪心の塊を強者にぶつけて発散して  
いる所もあって。

俺は、どんな子供よりも子供だと思った。

現実から逃げて、キレて、嫌って、馬鹿にして、調子に乗って……。

それでも、木崎みたいについて来てくれた人がいる。

ソレなのにそんな事実にも目を向けず、今此处で倒れたまま強者  
を恨む自分。

——変わりたい。

俺も力は欲しい。でも手に入れない。それなら変わればいい。

皆が力で補うなら、俺は何か別の事で補えばいい。

そうだ……、変わればいいんだ。

妬んで嫌う今の自分とはおさらばして、変わる。

力の差に恨みを持つんじゃない、現実を受け止めて自分に出来る事をする人に。

こんな状況でも「力」のせいにしない自分に。

トップになると宣言したじゃないか、弱者よ……、と格好つけてみる。今日くらい神様も許してくれるはずだ。

此処で立ち上げれば、何かが変わるかもしれない。体をどうにか動かしちまえば、変わるのかもしれない。指一本でも、瞬き一つでも——変わる可能性は、ある。

卑怯？何とでも言え。俺には力が無いんだから。

汚い？知らない、そんな言葉は俺の低知能な辞書に無い。

クズ？何とでも言え。

何とでも言う方がいい。俺はこの勝負に勝つ。どんな手を使っても、勝つ、勝つ、勝つ、勝つッ！！

「ふっ……」

ニヒルな笑みを浮かべたのは、俺だった。俺自身だった。

「どうしたんだよ？早く玉をぶつけるよ？なんでそんな顔してんだよ？どーした、ああ？」

目の前で愕然とした表情をする男子生徒に向かって挑発をかける。  
「……あー、やっぱそうか？おいプチ関西弁。お前……——玉が足りないんだろ？」

「な、なんなんや。ちゃんと三つは持っていたはずや。俺が踏み外す訳——ッ！！」

俺は、力なく腕を動かし、ポケットから玉入れと同じ玉を取り出

す。表情を変えないまま、男子生徒に言った。

「お前の望みだ。殴られる瞬間に落としてたみたいだな……はあ、拾ってよかった」

「くっ。お前、かえさんかいッ!!」 「嫌だな」

皮肉を込めて、壁に背を持たれながらゆっくりと立ち上がって、痛む腹は何故か軽々しい。

「な……卑怯やぞ!!こんな不公平な戦いッ!」

「……何とでも言えよ、不公平な力の所持者めが」

決着。王手。チェックメイト。終了。全てを願ってまず一つ目の玉をコツリと当てる。その玉はころころと転がってそれを必死に拾おうとする生徒に二つ目の玉を当てた後、それと同時に男子生徒は落ちた玉を拾う。

「自分で当てられ落ちた玉を拾う……悲しいな?プライドを持ったほうがいいよ」

「——ッ!??てめ」

負の感情だけで戦う人間ほど解り易いものはなかった。投げる場所が事前に反応できて、軽々とその生徒の玉を避けた。その避けた軌道を使って相手の脚を蹴り、体を倒す。相手を煽る所から計算通りに行き過ぎて正直驚いた。

「——ッく。正々堂々できんのかッ!!」

倒れた生徒の胸元に片足を乗せ、左腕に持った玉を上にかざして身動きを封じる。

「出来ないねえ?つか力変えてる時点で生もクソもねえだろ?逆に使えない俺が正々堂々してんじゃねーか」

「——、クソ、クソ、クソオオッ!!!!」

叫ぶ学生の声は大きく響き、旧校舎を震わせる。

「あー、哀れなり」

優しく、ゆっくりと左手を離れた。それは男の顔にコツンと当たり、床を転がって静止する。

「ゴメン。——チエツクメイト」

神様はまだ、迷える子羊を見捨ててないらしい。格好つけすぎて赤くなる顔を隠しながら、階段を上っていく。そんな中、アナウンスが鳴る。

《四十三人目脱落者発生、北野。残り四名です》

聞いて、力強く歩き出した。

こんな俺でも、変わるのかな……と現ぬかして、次なる場所へ。もう迷わない。諦めない。

### 三話「卑怯と変わる」(後書き)

ご愛読有難う御座います。

決意、変わる、勇気、卑怯。

正しい事は環境によって卑怯に変わり、不利な事はチャンスに変わる。

善と悪。矛盾した内容でやってみました。

それでは、有難う御座いました。

#### 四話「可愛いとフラグ」

一歩一歩を踏みしめて走った。足の裏が痛くなるくらい力強く足を動かして、階段を上ったり廊下から様子を伺ってみたりするが、誰も見つからない。そのくせ、

——人の気配はある。

背筋が凍るほど感じているのに、何処にも誰も居ない。上でも下でもない……縦横無尽に人は居ない。それでも何かがあるような気がして、体が負の感情に苛まれながら、それを防ぐ為にひた走る。まるで麻薬の幻覚とフラッシュバックを同時に感じてるのではないかと思うくらいの不安さ……いや比喩表現であって体感した事はないのですようん。

二人居るような感覚で、一人の足音だけが素早く音をたてている。四階までみても誰も居ないし、アナウンスが流れないので誰も脱落してない。となると隠れているか、屋上に居るか、すれ違っているか、になる。前者二つは特にありえそうだ。

「ん……な、何だあれ!？」 思わず声に出してしまう。

五階にある屋上へ連なる階段を上ろうとした時、階段にピンと張られている一本の荒縄が視界に入った。左右の手すりと手すりに繋がられていて、進入禁止をしているかのようだ。とても触れたくないぜ。

「……なんだ、これ」

これが畏だしよう。じゃあ何故こんなに太くする?こけさせるならこんなに見えるような太さじゃなくて、ワイヤーみたいにすればずだ。しかもこの紐の位置……なんで一般男子学生の腰の位置にあるんだ?絶対に転ばないだろ……。

「見なかったことにし——」

「よお、男子生徒」

「オイコラ誰だ俺を脇役のポジションで呼んでくるヤツは」 何処からか聞こえる声に、思わずツツコミを入れた。それでも俺は主人以下略。

「主人公は我だけで充分じゃ」

「そのお馬鹿口調で主人公の座を狙おうとするなよおい」

「馬鹿はそなたなりっ！」 「馬鹿だ、この声の主正真正銘の馬鹿だ」

頭を抱えながら、それでも話を続ける。こんなヤツクラスに居たかなーとか思っただけ、七組の連中が二組に来たのを考えると普通だと思っただけ。……いや普通じゃねえ。

「我はそなたの行く末を傍視しておった。可哀相ながらそなたは弱い」 「余計なお世話だ」 「我はそこを突いてそなたを罠にハマようと思っただけじゃ！ さあ、引っ掛るがよい！」

ふふふ、と笑う声の主は女だった。

それだけしか言う事が無い。さっきまでの監視されている感が消えて、何かもう対処が面倒臭くなってきつと罠は目の前にある丸解りロープだろうと思っただけが無視した。

「……………」

「なんじゃ？ はよう掛からぬか！ 何処に罠があるかなどは内密じゃが——」

「えっと、とり合えずこの荒縄退かしていいか。お前倒さないで次行けないんだよ」

「な、なんの事かな、あ！ なんの事じゃー？」 「なぜお馬鹿語に言い直した！ っ！ か素が出てる」

「わ、我は荒縄で罠を作ってそなたを引っ掛けようなどとは思っておらん！」

「あつそ。どっちにしるお前を倒さなきゃ駄目なんだからよ。早く出て来い」

「ふん。言われんでも居るわッ！ ！」 「は？」

右見て、左見て、また右を見た。後ろにも前の階段にも首を動か

したが誰もいない。誰も……ん？

「ここじゃッ！！」

——瞬間。

屋上に行くために踏もうとしていた階段の一段目がパカリと開き、そこから一人の女子生徒が勢い良く飛び出してきた。

「隙ありじゃ！」 「ぬわぁ！？」 自慢の裏声である。

飛び出して空中に浮遊している女子生徒との感覚は二メートル。

「死ねい！！」

その間髪を入れる前に、女子生徒は俺との距離を詰めて勢い良く殴りかかる。

「おおおおおお！！？」

何故かボールを投げずに襲ってきた、驚きながらもバックステップでその一撃を避ける。

「く……鼠か、そなたは！」 「お前こそ！邂逅もなしに襲われそうになったのは初めてだぞ俺！」

女子生徒は空振りした軌道をそのままに突っ込んできて、俺の腹に頭突きをしようと試みる。

「しーない！」 「喰らうかってのッ！！」

横に転がり頭突きをかわす。「の、のわぁぁぁ」女子生徒はそのまま床に倒れ、その隙をねらって背中に玉を当てようと思ったのだが――、

「……………、」

いや、コレは不可抗力だ。決してこの状況を狙う為に避けたのではなくかといって俺の目の前に広がる短いスカートからはみ出ているアレはそのなんと言うかきつと——うん、神様ありがとうッ！！俺の目の前には女子高生がぱたりと倒れており、そのスカートはいい感じにめくれて少しだけ中身が露になっている光景があった。何故か体が重たい。すっごく玉当てやり辛い。何コイツ、誘っ——

狙ってるのか、こうなる事？（あぶないあぶない本音が出そうに以下略）。

「ううう……くっそー、痛いよー……あっ、痛いじゃー」 「何故言い直す」

「わたし——わ、我はこの言葉が一番落ち着くのです、じゃー！」  
といいながら起き上がる女子生徒。思いつきりボロが出ているが指摘したら怒らせるだけなので話題変更。

「あーっと、あのさ、何で貴女は俺に玉を当ててこないんだ？」

「——ギクッ！」 「あーわっかりやすい反応だなー」 「ギククッ！」 「いや二回目は使わなくていいだろ」

起き上がった女子生徒は、廊下の壁にペタリと背中を預けながら「そ……それは」といいながら口籠る。紅潮していく頬がまた良いアクセントですね、と褒める俺。

「何？ そんな態度とられると結構気になるんだけど……」 「ここは意地悪に。」

「い、言わん、言わんじょ！」

「おお可愛い噛み方ですね」

「——かッ！？ か、かかかかかか、かわ……可愛……かかかかか——いー！？」

もうドショッパツから既に日本語じゃないが、挙動不審になるその女子をじつと見る。答えを聞くように、頬にどんぐり詰めたリスを見るように。

「か……かわいいなりけることそのうちは、それはそれは大きなお褒め言葉でござるが我はそんな言葉なりけるものでドキマギなとぜんのおじやるのことぞじゃー！？！？！？」

「すみません日本語でお願いします、可愛い可愛いお嬢さん」

「かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか、かわいと  
か言つなああああああああああああああッ！！！」

あ、頭から出た湯気が爆発した。皮肉交じりに言ったのにプラ

スに受け止めているのかこの天然……いや、勘違い娘さん。え、じやあ俺マズくないか？無駄にフラグ立ててないか？……いや気のせい――、

「わ、我がそなたに攻撃しないのは――！」

突然そう言った後、

「そ、そなたと一緒に……優勝……し、したい……から、じゃ？」

はいフラグ立ててましたホントごめんなさい。

そういえば優勝者は二人だったような……。え、如何しよう俺。

如何しようツ！？

#### 四話「可愛いとフラグ」（後書き）

愛読有難う御座います。

新キャラ出してなんか色々淒くしてみましたっ！

残り四人。「木崎」「変な日本語の少女」「主人公」「???」

さて……どうやって出していくかが楽しみです。

今日23時から新しい作品も載せるので、今後我が毛糸を宜しく  
お願いします。

それでは、有難う御座いました。

## 五話「豊ヶ原月見と恋戦争」

広い旧校舎の廊下を歩いていく。季節のわりに蒸し暑い熱気に表情を歪ませつつ、俺は言った。

「何でだ！」

「何がじゃ！」

俺の後ろをてくてくと歩く少女に言えば、奇怪な日本語が返ってきた。それに応じて振り向けば、俺の体操服のシャツを摘みながらついて来る人が居た。木崎よりも少しだけ長い髪で今まで見たこと無い真つ黒な色。それなのに幽霊に見えない顔立ちが素晴らしいものだった。言葉遣いを省けば……だが。

「お前知らないだろうがな、そのシャツの掴み方は確実に男子生徒を誘惑しているんだぞ！そしてそのてくてくな歩き方とか最早グツと来るランキング上位余裕じゃねえか！」

「申しとる意味が解らぬ。言葉ぐらい確りとしやべらんか！」

「お・前・に・だけは言われたくねえッ……！」

調子狂うな……こんな所木崎に見られたら凄い事になりそうだ。

多分、九重さんの時みたいに色々言われそうだが。モテル男は辛……いや、むしろこれはモテない男じゃないか？邂逅速達で俺に襲い掛かる生徒と暴言吐く女。モテてないモテてないはは。モテて無い事を祈りたい。俺はもつと違う意味で変わった女の子を求めているんだ！

あー、そういえば苅野は脱落したのだろうか？まああの子なら五分もせずにやられそうだし……いやでもアナウンス流れたか？残り四人……。あ。

「おい、お前……名前なんだったけ？」

「我は豊ヶ原<sup>とよがはらつきみ</sup>月見じゃ。月見と呼んで——」

「よし豊ヶ原、逃げるぞ」「うう……——って、何でじゃ!？」

いいから！とだけ言っつて、来た道を戻る為に振り向き一歩踏み

出した刹那――、

「あーら、経汰？新しいお友達かしらッ！！」

その声と同時に、右側にあった教室のドアが凄まじい音を立てて吹き飛んでいく。バラバラと木片が目の前を過ぎり、埃が視界を遮った。「ひッ！？」と言う豊ヶ原の声が後ろから聞こえてきて、シャツを握る力が強まるのを背中を感じとった後。

「マズイ非情にマズイ。コレは多分今までで一番マズイ。心臓刺されるよりマズイ」

脳がパンクしそうだった。埃の中にある人影は、シルエットだけで女性だと悟り、それが誰かも解っていたから……危険を察知して脳が思考と削除を繰り返す。

「だ、誰じゃ！私のシモベが怪我をする所だったではないか！」

「いつから俺はシモベになったんだろっ」

「シモベ……ねえ？ふーん。経汰ってそんな趣味？まあいいわ、このクソ変態がッ！」

ザヒュン！ 声とほぼ同時に横を何かが通り過ぎて、振り向くと壁が砕けていた。

「あー、うん。そうか、お前俺を殺す気だなマジで」

凄まじい勢いで通り過ぎて四階の壁を砕いたのが何かは言うまでもなく試合の玉である。

「悪い？トップだとか筋通すだとか容赦しねえだとか散々クサイ台詞吐いた弱者な輩をブッとしに来たら女とイチャついてたのでつい投げちゃいましたははゴメンナサイ」

「鬼め！鬼めええええー！」

「ほら否定しない。やっぱイチャついてたのね？もうめんどくさいから早く終わらせるわ」

「ちょ、まで。誤解誤解、ゴカイー！」

「おいシモベ。何を申しておるのだ？そしてあの女の影は誰じゃ？聞いた事あるような無いような……、恋人か？」 「それは違う」

「やはりな。我というものが有りながら他の女に手を出すのはどう



何が起きたか驚く木崎を無視して、気が付けば俺の足は動いている。

それは何処か、弱者が正義になろうと足掻くそれと似ていて。動く体に悔いなんて無く、むしろ動いてくれた体に感謝して……。バシンツ！ と、豊ヶ原に向かっていた玉は俺の左手が受け止めた。

ミシミシと唸る左の掌から強烈な痛みを感じながら、

「あ、あつぶね……」

それだけ言っと、驚きの表情だった木崎は我に返り、手に持った玉を落としてから。

「……ご、ごめ、ん」

そう呟いていた。それを横目に豊ヶ原に大丈夫か確認の視線を送ると、

「す……すまぬ。だい、じょうぶ？」

「あつはは、素が出てるし」

左手は大きく腫れて、ジンジンとした感覚以外を与えてくれない。それを見つめている豊ヶ原に「大丈夫だって」とだけ言って、もう一言。

「個人的にだけど、ゴメンよりアリガトがいいかな」

人を守ることが出来た自分に、有難うと言ってみた。

## 五話「豊ヶ原月見と恋戦争」（後書き）

ご愛読有難う御座います。

段々と主人公ナルシスト話になりそうでしたので、左手損傷させてみました！（おい）

一人称はいろいろ不便です。誰がどう思っているかを表すことが出来ないうし。

でも、主人公については良く知れるので大好きです。月と蟹を読みながらの更新です。

それでは、有難う御座いました。

## 六話「覚醒と最終決戦の幕開け」

「イテエ……ははは。超イテエ」

「れ、礼を言うぞ、シモベよ」 「いつまでその呼び方だ!？」

左手から来る表現できそうに無い痛みに耐えながらツツコミを入  
れると、その光景をずっと見ていたであろう木崎と目が合う。

「っ!？」

ピクリと驚き、申し訳無さそうに視線を廊下に変えた木崎は黙り  
込んだ。

この空気を如何にかせねば……。いや、如何にもならないんじや  
ないか?だって原因俺だろ?俺が「気にすんなって」とか言って大  
丈夫か?駄目だ駄目だ。……なら。

「こ、コホン。えーっと、あーっと、うん」

「「?」」

二人の視線が此方を向くのを確認して、頬を掻きながら。

「木崎。俺、コイツと優勝する事にした」

それを言えば直ぐに怒るのかと思いきや、「ああ……そう」とか  
予想外な反応が来たので調子を崩す。木崎はこんなキャラだったか  
?とか考えていると、顔を真っ赤にする豊ヶ原が視界に入った。だ  
から袖を摘んで恥じるな!お前は理性殺<sup>イロイロフレイカー</sup>しか!

「そう……よね、分かった。やつぱり経汰とじゃなくて正解みたい」  
「……は?」

そっぴいながら木崎は無表情でゆっくりと教室から出てきて、俺  
たちと向かい合わせになるよう体を向けた。三メートルの距離は何  
処か遠く感じ、その気持ちに釘を打つような言葉を耳にする。

「私も、一緒に優勝する人決めたわ」

発言と同時に、教室から一人の影……。砂埃で塞がれた視野に嫌悪  
を抱いて目を顰めると、

「あーあーあー疲れちったぜ俺様よー。アヤメちゃん。この気持

ち悪い感覚、弁償してもらうからねえ？ツケーペナー、宜しくな？」

金髪オールバック且つピアスだらけの男子生徒が、視界に入った。顎を上げてフラフラと歩き、俺を一瞥するカラーコンタクトの人工オッドアイは鋭く俺を睨んでから、

「コイツがキョータ君？おいおいマジかよ、こんなんより確実に俺のがいーだろ！？神様もビツクリだぜ！」

ケラケラと笑い、下心がありそうな目で木崎を見ながらその横に立つ。それに応じてか、豊ヶ原も俺の後ろから横に移動をして仁王立ちする。両者で向かい合い、とり合えず一言。

「うつせーよ絶滅危惧種“フリーヨー”」

ピキリ、と血管の切れる音がなぜか聞こえたと思えば、フリーヨー君が表現の出来ない崩れた顔をして、口を開いた。

「んだとゴラ？吼えてんじゃねーぞクソ犬！！」

「わんわん！」

「——ッ！？ぶ、ブツコロス！」

ダン！明らかに地面を蹴る音ではなく、砕ける音が廊下に響いた時——、既に俺の視界は金髪男子生徒の顔で埋まっていた。

「オセエんだよッッ！！」

それと同時に、フリーヨー男子の右手が凄まじい勢いで振りかぶられ、瞬間。

ドゴンッ！！ 腹から出た鈍い音と痛みが比例した。

「あッが……？」

視界が正面から下に変わり、次の鈍い音と痛みが聞こえたときには、既に上を向かせられていた。何がなんだか分からない怒涛の連撃が体を蝕み、痛みの感覚すらも薄れていく。途中で木崎の声や豊ヶ原の変な日本語等がうつすら聞こえたが、今の俺に聞こえるのは笑い声だけだった。

悪魔の、笑い声だった。

「フハ、フハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！？！？！？！？！カッスー？カッスー？え、何コイツ？20倍でボコボコじゃ

「ん！カス過ぎるんだよオラ！！！」

背中、足、腕、顔、鳩尾。体の各部分が物凄い速度で壊れていく。ミシミシと唸り、攻撃が止んだと思えば、金髪の男は俺の服を掴んで投げ飛ばした。

「休憩はイラナイみたいだねえ！？アヒヤヒヤ！！」

両手で受身を取ったが、勢いで体が転がり、口の中の血を吐き出す。ぐったりとして尚、金髪の顔を睨んだ。

近くで木崎が何かを言っているにも聞こえない。金髪男子生徒の声しか聞こえない。

三度目の敗北だろうか？

誰がそうさせるのか？

力を持っていない人間がこうなるのか？

書き殴っても答えには導かれず、ただ痛みに声を堪える。

——きつと、俺はうかれていたんだ。

——きつと、俺は調子に乗っていたんだ。

勝てるはずが無い。だって、俺には力が無いんだ。使えないんだ。

「……………」

…………いや、まてよ？おい、俺今両手で受身取ったよな…………？左手が使い物にならなかったのにどうして…………？そういえばさっきの階段も、腕を怪我したはずなのに…………？

ゆっくりゆっくりと自分の左手を見る。そこには何事もなかったような掌があった。

「——ッ！？…………フ」

「アア？何オマエ笑ってんの？え？もしかしてマゾ？キツモチ悪…………は？」

俺の目の前に移るのは、驚愕の顔をした男。そして俺は今——、両足だけで立っていた。

——昔俺は、存在外の集合体というものについて研究した事があった。人工衛星から電波的にエネルギーを貰い、それを糧にしてリミッターというものが機能する。つまり、電波が張り巡らされている

……。存在外の集合体とはその電波同士がぶつかり合って、ポルターガイスト現象が起こることだ。存在しないものが集合することで、ある筈の無いものが存在してしまう……。という事になる。

——小学校の先生は言っていた。「存在外の集合体から、稀に生物が誕生する。しかしそれは電波による一時的な物で、場所を変える」と張り巡らされてる電波状況が変わるのだから、消えてしまう。まさに存在外の集合体とは、天文学的数値で計算しても起こすことの出来ない、偶然なのだ」

——そして、担任は言っていた。「ありえない物にありえない事をされて、ある筈の無い出来事が起こったのなら、それは存在外の集合体が出たことで、されたものは存在外の集合体を上回るだろう」と昔の人は言っていたらしいが、それを聞いて三十年も経ったのに先生にはまだ意味が分からんな。でも、類は類を呼ぶらしくて、存在外の集合体は人間じゃなく同類の立場にいる人物と会話をしようとするらしい」

俺は今、全ての疑問の答えを知った。

ありえない生物に心臓を一突きされて、死ぬはずだったのに生きていた俺。

それは全て、存在外の集合体が俺にやったことで、生きていた俺はそれを上回っている。

——類は類を呼ぶ。

「分かった……。んだよ」

体から、じわじわと湧いて来る何かを感じながら。

「ふふ。楽しみだ」

俺は……。

「血祭りに上げてやるよ」

俺は……。

「クソ絶滅危惧種がッ——！」

——、人じゃないんだ。

## 六話「覚醒と最終決戦の幕開け」(後書き)

ご愛読有難う御座います。

久しぶりの更新、毛糸です。

今回はもうネタバレでいいかな、と思い書きちゃいました。

最後の一言で「なんだこれ」となるでしょうが、気にしないで下さい(おい!)。

それでは有難う御座いました。

## 七話「意味とありがとう」

徐々に、体の傷が癒えていく。

——サテライツは人工衛星。ハーヴェイは力ある者。コレに共通するのが私たち。人工衛星の電波から生まれた力ある者。決して「存在外の集合体」なんかじゃない。同じようで違うの。だって……—  
—力を持ってるんだもの？

——お兄ちゃんは、私たちと同じ。

あの少女が言った言葉の意味が深々と胸に突き刺さる。ハーヴェイサテライツという生き物。それはきつと、俺のことなのだろう。だから、俺にはリミッターが使えなかった。人工衛星で生れた「人じゃない生き物」なのだから。

——その子がテメエを仲間だとか同じだとか言ってたのなら……、  
テメエも同じ人工衛星で生まれた生命体って事じゃ……？

木崎の言っていた事は鋭かった。俺は、人間じゃない。人間のようで違う。心臓を一突きしたあの少女と同じ生き物。ハーヴェイサテライツ。

類は類を呼ぶ。同じ生き物のあの少女は、俺に警告する為に現れたのだろうか。

俺は——人じゃない。

人じゃないから、今俺は立っている。人じゃないから、立ち上がって金髪の男を睨んでいる。普通なら病院送りの怪我なのに、俺は人じゃないから生きている。

「お……おい。アヤメちゃあん？ ななな、なんだよコイツ？ 怪我してねえ！ いや、してたのにしてねえ！」

「うつせーよ。さつさと殴れよ。殴ってみろよ。殴って俺を殺してみろよ？」

一步、一步。近付いて行く度そいつは後ろへ下がっていき、五歩歩いた時。ポケットから玉いれに使う白い玉を出して振りかぶる。

——おにいちやん。強く投げらんだよ？強く、強くね。そうすれば、機械なんかよりも強い力になるんだ。

何かが脳裏を過ぎり、憎しみを込めて、強く投げる。

右手から離されたソレは、人がやったとは思えない速度で風を切り、ビュォ！という音を立てて真っ直ぐに金髪の方に飛んでいく。「うそだろうそだろおい誰か助けてくれよ！何でリミッターが使えないんだ！？おい！答えやがれバケモノ——」

ドゴンツ！！凄まじい物音と同時に、砂埃が宙を舞った。

ソレが治まると、金髪の男は腰を抜き、ガクガクと顎を震えさせているのが分かった。

それを伺ってから、一言。

「おいお前。降参したほうがいいんじゃないの？」

男は黙って土下座をした。

\*\*\*

念の為体の調子を見てもらおうと保健室の中で見てもらったが、なんとも無いらしい。安静にしろといわれていたが、落ち着かないのでベットからゆっくり起き上がる。

——どうして金髪君の体に当てなかったの？

脳裏に過ぎる言葉に「当てる必要ないだろう？」とだけ言えば、もう返事が帰ってくる事はなかった。その声の主がこの前襲ってきた少女だと言うまでも無く分かった。そんなのが脳裏に聞こえてきて奇妙じゃないのか？と聞かれれば案外そうでもない。人間じゃないからだろうか。

「はあ」

結局その後、木崎に大声で怒られて（理由が本当に分からない）、豊ヶ原が泣き喚いて（理由が本当に分か以下略）、試合にならなか

ったので中止になり、上位二名をクジで決めるといふ担任の大胆な後発により絶滅危惧種フリーヨと椎名君という生徒が準決勝に進む事になった。二人共やる気が無さそうだったのは言うまでも無い。

でも、これで良かったと思っている。木崎が案外普通に接してくれたし、豊ヶ原もごく普通だったし。てつきり軽蔑されたりするんじゃないだろうか？と思って聞いてみたけど、「経汰は人間よ。私がそういつてるんだから間違いないわ。もし違っても、そんな事で軽蔑するわけ無いじゃない。むしろクヨクヨ悩んでいる経汰に軽蔑するわ」という答えが返ってきたので礼を言った。

ちなみにあの金髪フリーヨには適当に優勝すると言っただけらしい。むしろ俺をボコボコにするとは思って無かったらしく、謝ってくれた。

そんなこんなで、馬鹿みたいに張り切った学年序列決定戦は幕を閉じる。

ドラマのように主人公が活躍する事はなく、それでいて何処か不思議な大会だった。

保健室から出て、自分の教室の前まで向かう。  
一年二組の自分のクラス。ドアに手をかける。  
皆は、こんな俺を受け入れてくれるんだろうか？

張り巡らされていたカメラから見ていただろうから、きっと知っているはずだ。

でもまあ……嫌われてもやって行けるだろう。どうせ三年だし……。

そんな事を考えながら震える手でドアを開ければ、想像とは逆の光景が広がっていた。

悩んでいた自分がアホらしく感じてしまう光景が。

『経汰、おめでとう！』

黒板には、汚い字で「MVP里堆」と大きく書かれていて、木崎

を中心に鳴るクラッカーと拍手。笑顔の皆は、俺を優しい眼差しで見ている。

「ありがとう」

頬から流れる涙は、思い出として胸に焼きつき、離れないだろう。

## 七話「意味とありがとう」（後書き）

ご愛読有難う御座います。

本日二度目の更新、毛糸です。

学年序列決定戦を無理に終わらせました……。最初から早く終わらせる気でいたのですが、長く続きそうになってしまい……。終わらせざるを得なくなりました。

でも結構まとめれた気もしないでも無いのですが……。 （笑）

今は次の話のプロットを作成中ですので、もっと確りした話を作ろうと思っています。

それでは、有難う御座いました。

## 一話「雑草と雑日」

“生徒会一同からの願書”

“以下の人物を「新」風紀委員への参員とし「旧」風紀委員長兼、生徒会長直々に申請をする”

副将 “大裂渦身”  
おおなきつすみ

支将 “豊ヶ原月見”  
とよがはらつきみ

大将 “里堆経汰”  
さとついきよた

“グループの名を貴公団とし、参加を拒否した場合以上の生徒を退学と処す”

\*\*\*

目を瞑り、深く呼吸をした。春も終わり初夏の悶々とした空気が肺一杯に溜まっていく。それだけで俺が外に居るのだと分かるだろう。こんなムンムン湿気が家だったら色々とか問だ。拷問といえはこの鼻をつつく青々とした匂いが気に食わない自分、里堆経汰である。

息を溜めて溜めて、気持ち悪くなってから――、

「おい木崎！休憩なしかよっ！」

そんな俺の心は、拷問よりも夏よりも怒りの熱で燃えている。

――1――

そもそもどうしてこうなった……うん、そういえば始まりはあい

つの一言から始まったんだっけ。

“何かしたいわよね”

あいつしかない。俺は目の前に広がる光景を瞼という素晴らしい人体の器具で遮断させた後、唇をかんでみた。案外痛いこれ。

木崎溪。きさきあやめあの俗に言うツンデレ（とは言ってもデレが一割しかない）が授業中にも関わらず俺に話しかけたせいで、俺は今無性に腹立たしい。忌々しい。というか腰痛い。

「こら経汰！サボるな！！」

「何だよこのシチュエーション！普通は女子高生が何かしたいと言えば映画とかバトミントンとか観光とか都会でウィンドウショッピングとか華々しい日を過ごすんじゃないのかよ！？」

「うわっ！妄想信者キモ！！」

「どうせ俺は女性との交際経験が少ないですよーだ！」

「えっ！？ゼロじゃないの、チエリー君」

「神様忌々しいを通り越した言葉を僕にください」

初夏の熱が増す今、俺は暴力女の家にある庭で草むしりをしているのだった。

— 2 —

「むしむしむしむし」 いや決して虫を連想させているわけではなく無視でもない。気温がムシムシしていて草をむしっているからそれを繋げて――、

「虫がどうかしたの？」

「あのさ今俺が心で違うつて否定した用語を聞かないでくれるかな物語のテンポが崩れるとこちらとしては――」

「何ごちやごちや言ってるの？はやくそこの草抜きなさいよ」

ハイ、と棒読みで即答。ドラ。もんに出てくるような大きな庭を一瞥し、草の生えている部分を抜き取っていく。ぶっちんぶっちんと音を立てては雑草という名の命を終わらせていき、同じ動作を

三時間はやっているだろう……と心で愚痴ってみた。

「……………」  
空間でもないのに、草を抜くときの音だけがこだましている様に感じる。

きつとこの分かりづらくて無粋な比喻表現が出てくるのは、六月の梅雨の湿度で俺のカラカラな脳みそがシケツてるからに違いない。間違いはない。……文才能力を季節で言い訳する自分が恥ずかしい。

「……………」  
いやはや会話が無いのですな木崎さん？僕だけが心の中で叫んでいるって結構奇妙なんですけども……。と戯言を心で呟いてから、目の前に居る木崎に視線を変える（勿論草を抜きながら）。

長くて艶のある髪を後ろで雑に束ね、学校のジャージ姿にも拘らず美少女オーラを出しきる素晴らしい生き物が其処に居る。だがしかしチャラ男の皆様この子にナンパしちやいけません、いや決して俺の女だからとかかっこいい事言ってるんじゃないから……率直に言おう。死ぬぞ？ははは。いや冗談じゃねえから。

「はあ……面倒ね。使いたくなかったけど、やるしかない……かな」  
「は？」

突然木崎が喋りだし、とっても嫌な予感と悪寒と冷や汗を胸に、問いかける。

「な、何するつもりだよ木崎何でリミッター弄ってんだよ今火事場を使うときじゃねーだろうが——」

「経汰、二つだけ言っとくわ……。まず一つ目が、火事場の馬鹿力を使っている状態をハーヴェイ状態っていうのよ。そして二つ目が——」

右手を上にした木崎はチラリと此方を見てから、

「逃げなさい、死ぬわよ」

「そっち先に言えよッ！……！！」

ゴッオオオオオオオオオオ！！

「——、」

凄まじい轟音と同時に竜巻のような突風が俺の体を叩いた。視界が空に変わったと思えば、いつの間にか何度も転がって木崎家の壁に背中を強打する。頭がクラクラしながらも砂埃が舞う庭を凝視すると、草だらけだったはずの其処は見違えるほど茶色で一杯だった。「ふう。草むしり終わり。これでレンガ埋めれば、日曜大工は終了ね」

砂埃の庭から、一人の美少女がそう言いながら此方へ向かってくる。まず一言。

「何しやがる」「逃げろって言ったじゃない」

「いや、俺が聞いたのはハーヴェイ状態で地面をぶつ叩いて草を吹き飛ばす一秒前の死の予告だけだ!!」

「ほら、私予告してるわよ?」

「一秒で何が出来るって言うんだ!」

「死の覚悟」「殺すつもりだったのかよ!」

そう言うとき木崎が、ウツサイわね男なんだから小さいこと気にしないでくれる? 的目線を送って来るが、ハッキリ言おう「小さくないぞ」。まあこんなの日常茶飯事な俺なので、特にキレたりはしない。……自分で言って悲しいぜ!

自暴自棄になって頭を抱えていると、目の前で仁王立ちしてた箸の木崎が俺から視線をそらし、視点を泳がせて且つ頬を人差し指で掻きながら、

「まあ後は私の親がやるから、一先ずシャワー浴びて休憩ね……うんと、そつ、そそ、その後何処か行つてあげても、いい、いいわ……よっ」

俺の目の前にいたはずの怪力能力を駆使し暴力を振るう女は、ツンデレが様になる美少女に変わっていた。

素直じゃないな! と思いつつ、座っていた体を起こし、立ち上がる。

「あつはは。とりあえず風呂かせよ」

——ケータイの時刻は十時三十一分。大きな町での小さな物語は、

そこから幕を開ける。

## 一話「雑草と雑日」（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

久しぶりの更新。か細い毛糸です。

えっと、やっぱり展開の速さについて指摘してもらい、それにも気をつけて書くこうと思っています。アドバイスありがとうございます。現在新作を二つほど作成中なので（内容は、評論家のようになら目線なお話です）そちらもお願いします。

それでは、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8110p/>

---

ハーヴェイ・サテライツ

2011年3月24日18時55分発行